

2016.6.19

清らな光さす  
祭り



その扉の向こうには、小さな花の咲く野原が広がっていた。

どこにでもありそうな、特に珍しくない、素朴な景色。

しかし、それは私の胸をひどく締め付ける。

とても——懐かしい。

広い野原には、ぽつんとひとり、子供がいる。

遊ぶには向かないであろう、かわいらしい凝ったデザインの白いワンピースを着せられ、機嫌のよくない顔で花冠を編んでいる。

あれは、あの姿は、

「……清光、信じてもらえないかもだけど、あれ、あの子供、私！ あれ、子供の頃の私だよ！」

それは、おぼろげな遠い過去の日々の記憶とぴたりと重なる眺めだった。

白い小さな花の咲く野原、ひとりきりの私、無理やり着せられたお出かけ用の白いワンピース…

…

脳裏に、これまでぼんやりと霞がかった記憶が徐々に浮かび上がってくる。

それは、今までなぜ忘れていられたのかと不思議に思うほど鮮明なもので、ものすごいスピードで私の脳裏に展開してゆく。

そして、私は確信する。

もしあれが幼い日の私なら、きつとこの後に——

わたしは、むかし、のはらでおうじさまにであいました。

「王子、様、が……」

「王子様？」

怪訝そうに問い返した清光の言葉を肯定するかのよう、そこに現れた者がいた。

黒くしなやかなそのシルエット。

ひとすじ長くなびく、なめらかな黒髪。

そして、紅い——つややかな爪と、うつくしい瞳。

幼い私の前に跪き、うやうやしく手を取ったその人物は、

——加州清光、そのひとだった。

刀とそのあるじは、別れを惜しんでいました。

これから刀は、あるじの命（めい）で遠いところへ行かねばなりません。

そして、旅に出たなら、もう戻っては来られません。

誰よりもたいせつなあるじとも、今生の別れとなるでしょう。

それでも刀は行かねばなりません。

なぜならば、それは大事な大事なあるじの、何よりの頼みであるからです。

刀のあるじは今、死の床についています。

あるじに母はなく、父はとてもひどい人間でした。

欲深く、野望をもち、自分さえ良ければそれでいい、そんな考えの持ち主でした。

そして、その勝手な考えを娘にすら向ける、血も涙もない人物でした。

その父に逆らったことにより、刀のあるじはその身に呪いを受けました。

それはとても恐ろしい呪いで、刀のあるじは声と光を奪われました。

不自由な身となった娘に父は「死を免れたくば言いなりになれ」と迫りました。

しかし、刀のあるじは屈しませんでした。

たくさんの刀を従え、たいせつなものを守ることを知り、つよさを身につけていたからです。

刀のあるじは、一等はじめにひとの身を与えた刀にだけ、こころに秘めたある願いを打ち明けました。

それは、実の父がこれからしようとしていること、それにより生まれる世界と未来が実現しないよう阻むこと。

もしそれが叶ってしまったら、この世はきっと恐ろしいものになってしまう。

刀のあるじには、それがわかっていました。

また、親の過ちは子である自分が正すもの、ほかの誰も巻き込めない、とも。

だから、自分がいちばん信頼する刀に、希望を託すことにしたのです。

何よりもたいせつな刀と別れることは、あるじにとって、自分の身を半分に引き裂かれ持ち去られるくらいの悲しみです。

それは刀も同じでした。

あるじは刀を、そして刀もあるじを、深く強く愛していました。

しかし、それでも刀は行かねばなりません。

あるじが望んだ未来へと続く道をつくるため、あるじの願いを叶えるため、  
——どうしても、行かねばならないのです。

事の発端は、時期外れのウィンタースポーツにはしゃぎすぎたことだった。

昨年に起こった刀剣男士絡みのある事件。

その困りごとを、政府の対応を待っているのは埒が明かぬと自力で解決したのは、昨年のクリスマス・イヴのことだ。

こちらとしては、たいせつな皆に突然ふりかかった災難を何とかせねば、と思ってしたことであったが、どうやら政府としては喧伝されては都合の悪い事柄であったらしい。

なぜそれがわかったかと言うと、事件に対しての口止め料としか思えない、時期外れかつよくわからない名目の多額のボーナスが、今頃になって転がり込んできたからである。

降って湧いたその臨時収入を、私は皆でパーッと使ってしまおうと考えた。

どうせあぶく銭であるし、解決するまでの間に生じた諸々の遅れを取り戻すために、せっかくの年末年始をろくに休めも楽しめもしなかったことを申し訳なく思っていたからだ。

ここはひとつ、一同で温泉にでも……と考えていたところ、誰かが持ち帰ってきた万屋のチラシがきっかけに、近ごろ皆がこぞってハマっていたウィンタースポーツが題材の映画が後押しとなって、あれよあれよという間に季節外れのバケーションの内容が満場一致で決定され、私のいい湯だなプランはあっさりと消えてしまった。

ちなみに、決定打となったのは間違いなく、今剣の放った大昔の若者向け映画の題名であったと思う。

「わたしをスキーにつれてって、ですよ、あるじさま！」

——かくして、万屋でのシーズンオフ大売出しのウェア、スノーボード、スキー板などの購入でボーナスはきれいに飛んでいき、本来はしとしと雨が降り紫陽花が咲き乱れている筈の本丸は、冬に逆戻りと相成ったのである。

\*\*\*\*\*

白銀の世界に、色鮮やかな姿が散らばっている。

本丸の裏手にあるそれほど高くない山。景趣の変更によって突如として雪山と化したそこで、いつもは思い思いの個性あふれる格好をした皆が現代のウェアを身にまとい華麗に雪原を滑る様は、なんだか不思議な気分になる眺めだ。

それぞれ美形揃い、スタイルも抜群で、しかもプロも顔負けの見事な滑りである。もし現世に連

れて行ったならどんなにか騒がれることだろう。

もちろん、それは私の恋びとにして初期刀である加州清光も例外ではなく、黒を基調に渋めの赤が差し色のジャケット、グレイの迷彩柄ボトムがとてもさまになっている。また、ニットキャップでひたいが全開なために顔立ちのきれいさと紅い瞳が際立っており、もしスキー場に佇んでいたら、きっと女性が鈴なりになってしまうだろうと思われた。

片や、私はといえば、

「ひゃあああ！」

——ズシャン。

無様に尻もちをつく、清光が慌てて駆け寄ってくる。

「うぁ、あるじ大丈夫？」

私は意気消沈して、へたり込んだ姿勢のまま情けなくその顔を見上げる。

「……うう、やっぱ無理だよ……私、運動神経も才能もセンスもないんだよ」

そう弱音を吐きしょぼくれるのを手を差しのべて起こしてくれながら、

「そんなことないって！ さっきに比べてだいぶ転び方うまくなったと思うしき、もうちょっと頑張ればいけるよ、ね？ あるじ」

と清光が苦しいフォローをする。

そのやさしさが嬉しいと同時に心苦しくて、私は更にしょんぼりしてしまう。

なぜなら、皆が存分に超がつく上級者っぷりを発揮して滑りまくっているというのに、超がつく初心者である私にずっとつきっきりの清光は、未だまともに滑っていないのである。

「……やっぱり、スノボよりスキーの方がいいかなあ……ほら、まだ杖になるものがあるし」

まだ雪の残る尻をはたきながら、足元を恨めしげに見る。

大体このスノーボードというやつは、上半身がふらふらと心許なくてたいへんに怖いのだ。頼るものがない心細さだけでも泣きそうなのに、当たり前ではあるが足元が滑る。もうそうになると恐怖でパニック状態に陥ってしまい、無様にバランスを崩して転ぶ、というのが毎度のパターンだ。

怖くて痛くて情けなくて泣きたいのに、清光はそんな私に「重心をもっと前に」なんて恐ろしいことを言う。

「やだ、清光、怖い、怖いよう」

半泣きで訴えれば、清光は困った笑顔を浮かべながら「そう言わずにさ、一緒に頑張ろうよ、あるじ」とやさしく励ました。私は沈んだ顔で首を振った。

「清光……もういいよ、ずっと私にかかりきりで全然たのしんでないでしょ。ひとりで頑張ってるから、みんなと一緒に滑ってきなよ」

その言葉を受けた彼が、何かを言おうと口を開いたそのとき、

「あるじさま、もうスノボはあきてしまいました！ ぼくとそりすべりしましょう！」

と後ろから元気よく今剣が飛びついてきた。

危うくまた尻もちをつきそうになるところを、清光が抱きとめてくれる。

今剣はさっきまでそれは楽しそうに滑りまくっていた筈で、飽きたというのは私への思い遣りから出た言葉であるのは明白だ。

そのやさしさに、ああ、短刀にまで気を遣わせてしまう運動神経のなさって……と遠い目になった私は、ひとつ息をつく

「やっぱりもう少し頑張ってみる！ 絶対、滑れるようになるんだから！」

と気合を入れて宣言した。おお、と目の前のふた振りが感嘆の声を上げる。

「そうこなくちゃね、じゃ、あるじ、もうひと頑張りしよっか。さっきも言ったけどさ、転び方だっただいぶ上手になったし、あと一息でいけるって絶対！」

「——そう、その姿勢を保ったまま、軸足に全体重をかけて……」

清光の声を聞きながら、怖々と指示の通りに体重移動をしようとする。これまでと同様に恐怖心に支配されそうになるが、根気よく練習に付き合ってくれた恋びと、そしてけなげな今剣を思い浮かべ、ええいままよ！ と全体重を前に出した足へとかけてみた。

「……！」

しかし、滑り出したそのスピード、そして恐怖は予想をはるかに超えたものであった。

「あるじ？ ちょっとスピード出しすぎ！ ひとまず教えた通りに止まって！」

背後から聞こえる清光の声が遠ざかっていく。風を切ってどんどんスピードを増していく自分の体に、私のこころは恐怖で塗りつぶされてしまい、教わったことも何も思い出す余裕などないまま、白い斜面を一直線に突き進んでいく。

「いやあああああ！ 怖い、助けて、たすけてきよみつううううう！」

——後から聞いた話では、私がそう叫ぶよりも前に、事態を把握した清光と今剣はボードを装着し全力で追いかけてきていたのだという。そして背後から清光が「止まれないなら転んで！ 転んであるじ！」と呼びかけていたらしいが、頭が真っ白になっていた私には何も聞こえていなかった。

そんなことをしている間に、最悪の事態が猛スピードで近づいてきていた。

「加州！ このさきはがけですよ！」

「あるじ！」

進行方向から横にずれ、雪が吹き溜まり低い壁のようになった部分を利用し大きくジャンプした清光が、ひたすら直線に進み続ける私に並ぶように追いついてくる。

そして、そのまま距離を詰めると、横から私を抱きかかえるように飛びついた。

もともと弱っていたものか、無理な姿勢で負荷がかかったからか、その衝撃で清光のボードのス



トラップがちぎれ、足から離れた流れ止めのついていないボードがそのまま崖に向かい滑っていく。

私たちも勢いを殺せず、ひとかたまりになって斜面を転がっていった。

ふわ、と一瞬だけの浮遊感。

その感覚を最後に、私の意識は途切れた。

刀のあるじの母は、さる名家の出でした。

その一族はいにしえより霊力の高さで栄えてきましたが、時がうつり科学がそれにとって代わるにつれて、表舞台から去らざるを得ませんでした。

科学が幅をきかせるようになった世の中に、彼らの居場所はなかったのです。

しかし、時がさらにうつった頃、ふたたび一族に光が当たる出来事がおこりました。

それは、「歴史をかけてのいくさ」でした。

歴史修正主義者と名乗る、政府に、そして「正統な歴史」に仇をなすものたちが、歴史の重要な変わり目を狙い、攻撃をしかけてきたのです。

彼らは、時間遡行軍と呼ばれる異形のものたちを率い、歴史を「改変」しようと時を超え、過去に介入しました。

ふしぎなことに、その異形のものたちはすべて刀の化身でした。

だからでしょうか、刀を制すならば刀で、ということなのでしょう。

政府は、それら「正統な歴史」に仇なすものたちを討伐するために、あるものたちの力を借りることにしたのです。

それは「刀剣男士」と呼ばれるものたち。

日本刀に宿った、九十九神たちでした。

そして、彼らを召喚し、人のかたちを与えるちからを持つ「審神者」を探し、集めました。

審神者——眠っている物の想い、心を目覚めさせ、自ら戦う力を与え、振るわせる、技を持つもの。

それはまさに、かの名家のためにつくられたようなお役目でした。

その家のものは、ほぼもれなく時の政府に求められている才を持ち合わせていました。

そういう血を持つ一族でした。

いくさが続くにつれ、名家はかつての勢いを取り戻し、その力はみるみる強く大きくなっていったのです。

いくさは、時代のなかに埋もれ衰えていこうとしていた古い家に、ひとすじの光をあてたのでした。

刀のあるじの母は、そんな一族の娘でした。

娘は、家が求めるままに幼いころより研鑽を積み、審神者のお役目を賜りました。

そして、はじめての刀に「加州清光」を選びました。

娘の初期刀となった加州清光は、紅い瞳となめらかな黒髪のうつくしい、しなやかな男性の姿をした九十九神でした。

刀は娘をよく助け、深い思いやりと愛情をもって支えました。

そうして時を過ごすうちに、たがいの間には、いつしか恋がめばえていました。

目を開けると、これ以上ないくらいに心細そうな顔をした清光が目に入った。

「よかった……あるじ、どこも痛くない？ 俺のことわかる？」

「清光……大丈夫？ ケガはない？」

頬に手を伸ばしそう問い返せば、それをぎゅ、と握った清光は頷いた。

「雪がやわらかく積もってたところに落ちたみたいでさ、だからケガとかそーゆーのはないんだけど……上、見て」

そう促されて見上げれば、先ほどまで滑っていた地面は遥か上にあり、あの高さから落ちてよくぞ無事だったものだと思ながらにぞっとする。続いて周りを見れば背後と目の前に高い壁がそびえており、切り立った崖と崖の狭間に落ちたのだということがわかった。

私の脳裏に、いつか見た山岳救助がテーマの映画のワンシーンが浮かぶ。これは……私たちが今おかれた状況は、助けるのも助かるのもかなり難しいパターンではないだろうか。

「本当にごめんね清光、私のせいでこんなことになって……どうしよう、何とかして地上に戻らないと——」

その先はさすがに口に出せなかった。

今はまだ日が出ているからいい。しかし、このまま夜になったら……冬場の山、それも身一つである。いくら刀が本体だといっても、今は人の体を持つ清光が無事でいられる保障はない。もし彼の身に何かあったら、私はたとえ死んでも死にきれないだろう。

そう考え小刻みにふるえだした私の腕を、清光がさすった。

「あるじ、落ち着いて。大丈夫、俺が絶対にあるじを助けるからさ。だからそんな顔しないでよ」

そう言って抱きしめてくれる背に手を回し、しばし気を落ち着けた私はそっと身を離して

「……そうだ！ こんなときのために——」

と分厚い手袋を外した。

「……？ あ、あーあれ、こないだやたらと練習させられてたやつ」

合点がいったらしい清光に頷き、私はおもむろに指笛を吹いた。

ピュウイイー、とよく通る音が谷間に響き渡る。

うまく音が出たことに気をよくして、私はそれからも疲れるまで続け、みんなが気づいてくれるのを待った。

しかし。

「……誰も来ないね」

「……そーね、降りて来られないまでも、上から声くらいかけてくれてもよさそーなもんだけどね」

口が疲れた私と、それを肩をぽんぽんと叩いて労った清光は、情けない顔を互いに見合わせた。

「ま、こーしてても罫が明かないし」

清光が私の頭をなでて立ち上がる。

「とりあえず、どっかから上がれないか調べてみよっか、あるじ」

彼の手を借りて立ち上がってみれば、確かにケガはないようだ。歩くにも別段の支障がないことを僥倖に思いつつ、私は清光としっかり手を繋いでクレバスの底のような狭間の探索に出かけた。

左右にそびえる壁は途切れることなく続き、私は歩きながら「裏山にこんな場所があったらどうか」という疑問を抱いた。しかし、事実こうしてその場所にいるのだから、私が知らないだけで存在していたのだろう。そう自分を納得させると、今はとにかく本丸へ戻ることだけ考えよう、と気持ちを切り替える。

「あるじ、あれ見て」

清光の声に、彼が指差す方を見やる。すると、少し先に横穴らしきものが見えた。

「なんだろう……洞穴？」

「中がどうなってるかは確かめないとわからないけど、万が一のときに寒さをしのぐことくらいはできるんじゃないかな。行ってみよっか」

横穴の入り口から覗き込んでみると、中は思った以上に深いとみえて、暗闇に吞まれた奥は見通すことができない。

「……あるじはここにいて。俺が様子を見てくるからさ。もし、しばらく経って俺が戻らなくても、絶対に後を追って入ってきちゃダメだよ」

そう言い置き、中に入っていこうとする清光を引きとめる。

「置いてかれるのはやだよ、一緒に行く」

「だ一め、もし何か危険があったらどうするのさ、初期刀としても恋びととしても、あるじを危ない目に遭わせるなんてあり得ないから」

そう諭す清光に、私はなおも言い募る。

「そうだとっても、もし清光に何かあって戻れなくなったとしたら、私なにがあっても助けに入るよ。だって、ここでずっとひとりでいたって事態は変わらないもの。ねえ、だから一緒に行こう？ 離れ離れはやだよ」

その必死な剣幕におされたものか、清光が困った顔で逡巡した。

「ね？ ……私、ひとりで待ってるの怖いよ」

そのダメ押しが効いたのか、心配性な恋びとはしぶしぶ頷いた。

「わかった。そこまで言われちゃしょーがないよな……絶対に俺のそばから離れないでよ、わかった？」

穴の中は暗く、夜目のきかない私は入ってすぐ右も左もわからなくなってしまった。

おとなしく清光に手をひかれるままに進む。内部は外気が遮られているせいかこころなしか暖かく感じられる。意外にも空気に澱みは感じられず、私はまるで遊園地のアトラクションにいるようだな、と思った。また、そうであったならどれだけいいか、とも。

しばらく進んだ頃、足元に微かな振動を感じた。

清光が警戒した様子で立ち止まったので、私も足を止める。

「……地震？」

小さい声で訊ねたとき、背後から硬い物がぶつかり合うような激しい音が響いた。それと同時に清光に抱きかかえられて地面に倒された体に強い振動が伝わり、上からバラバラと細かい石や何かが降り注ぐ。

真っ暗闇の中での突然の出来事に私は身をすくませ、きつく清光にしがみついた。

——それからどれくらいの時間が経っただろう、暗闇で時間経過の感覚が狂った私には長く感じたが、実際はそれほどでもなかったのかもしれない。

いつの間にか音はやみ、辺りは静けさに包まれている。

清光はそろそろと体を起こすと、腕を回して私のことも抱き起こしてくれた。

「さっきのって……」

声をひそめて問うた私に、清光は硬い声で「たぶん——落石じゃないかな」と答えた。

振り返れば、遠くに小さく見えていた光はもう見えず、ぐるりと見回しても同じ暗闇が広がるばかりである。

「もう戻れないの……」

そういうつもりはなかったのに、口から出た私の声には怯えがにじんでいた。

「そーかもね」

まるでなんでもないことのように軽くそう答えた清光は、ぎゅ、とまた私の手を握ると

「じゃ、進むしかないよな。だいじょーぶ、何があってもあるじは俺が守るんだからさ……俺じゃ頼りない？」

と、冗談めいた口調で訊ねた。

あわてて首を振れば、暗くて見えないのに、清光が得意そうに笑ったのがわかった。

「ま、当然かな。だって俺は、あるじの彼氏だし……一番の刀だからさ」

更に先へ進むと、ある時点で足元の感触が変わったのがわかった。

それまではごつごつとした岩のような踏み心地であったものが、平坦な——まるで舗装された道路か建物の廊下のような感覚に変化したのである。

そして。

「……マジで？ これ、どーゆーことだよ」

私たちの目の前には、明らかな人工物——ドアノブがついた扉が、まるでずっと昔からそこにあったかのようなさまで、佇んでいた。



やがて、互いの気持ちを確認めあつた加州清光と審神者の女性は、晴れて恋びと同士となりました。

そして、他の刀たちと共に懸命にたたかい続けました。

しかし、どれだけ必死にたたかえどいくさは終わらず、ただ月日がすぎるばかりでした。

だんだん、女性と刀たちは、何のためにたたかい続けているのかがわからなくなっていました。

——歴史をまもる。

それは正しいことです。きっと正しいのでしょう。

しかし。

それは、はたして「誰にとって正しい」歴史であるのか。

または、「誰にとって都合のいい……」歴史であるのか。

政府と歴史修正主義者は、どちらもこう主張します。

正しいのは自分たちだ、と。

そして、正しいのは、自分たちが望む歴史である、と。

幾度もたいせつな仲間であり家族である刀が傷つき、ときには命を危険にさらし、それでもたたかいは終わらない。

中には、たいせつな刀が折れた審神者もいる。

そして、自らの命を落とした者も——。

それでもいくさは続きます。

欲の数だけ、尽きぬ醜い望みの数だけ、そこには犠牲が必要です。いのちが必要です。

もっともっとと求める先は果てがなく、続けば続くほど、いのちの価値は薄まって。

しかし、いのちを懸けるのは、いのちを懸けているのは、けしてたたかいを望む者たちではない。

。なんの得も関係もないいのちが、来る日も来る日も消費されつづけている。

それが、此度のいくさでした。

歴史をまもるといふ、大義でした。

犠牲になるのは、いつだって末端のものでした。

「お国のために」といふ、いつか遠い昔に日ノ本で幾度も聞かれた言葉のもとに、



——女性のたいせつな恋びとで、家族で、相棒であった加州清光は、  
だいじなだいじな「さいしょのかたな」は、  
そのいのちを激しく散らせたのです。

.....誰よりもだいじな、誰よりもいとしい、恋人を、あるじを、守るために、刀は。

「ど、どうする？ 清光……」

突如あらわれた扉を前に、私はそう言いつつ彼の腕にしがみつく。

ずっと自然物だとばかり思っていた洞穴にこんなものがあること自体が不気味だし、不用意に開けてしまって、向こう側にとてつもない危険——たとえば溶岩のような危険なものが流れ出てくるとか、どっとゾンビのような害をなす存在が出てくるなど——があったらと思うと恐ろしい。しかし、清光は冷静な声で「いや、開けるしかないでしょ」と即答した。そして、驚く私に顔を近づけ

「だって、戻ることができないんなら進むしかないじゃん。そうでしょ？ とりあえずここで行き止まりみたいだし、このまんまここに留まっても、最悪……酸欠になっちゃうかもしれないし」

俺との口吸いでそうなるならともかくさ、まるで内緒話のようにささやく。

それはたぶん、恐怖心をやわらげてくれようとする彼の思い遣りで、その思惑通りにどきどきして怖さが薄まってしまうのだから、私もたいがい単純だ。

「じゃ、開けるよ」

私を背に庇った清光がドアノブを調べる。

そして、特に危ないことがなさそうなのを確かめると、そうっと手を伸ばしノブを捻ると、扉をゆっくりと開いた——

途端にまぶしい光があふれ出して目を刺し、私は手をかざして目をつぶった。

少しの間をおいて恐る恐る目を開けば、眼前には洞穴から続いていたとは思えない光景が広がっていた。

「……どういうこと？」

そこは、何の変哲もない住宅地の傍らにある野原だった。

辺りはまだ開発中らしくあちこちに柵などで囲われた空き地が見え、その合間にぽつんぽつんと真新しそうな家が建っている。

さやさやと気持ちのいい風が吹くそこには、青々とした草に混じって白い小さな花がたくさん咲いている。それらが静かに揺れているさまは、特別なことなど何もないのに泣きたくなるような眺めだった。

そして、野原の草に埋もれるようにして、ひとりの子供がいた。

ぽつんとひとりで、手元を一生懸命に見つめて何かをしている。

子供は不機嫌そうな顔をしていて、髪がゆらゆらと背にかかるくらい長くて、外遊びには向かないであろう白い可愛いデザインのワンピースを着ている。

.....白いワンピース。

よく目を凝らしてはっとする。

私は、あの服に見覚えがある。

続いて、辺りをもう一度よく見る。

私はここを知っている。この場所を、この野原を知っている。そしてあそこにいるのは、あれはもしかして――

「清光、私、ここ知ってる.....ってというか、あれ、あの子」

急に動転しだした私に、清光が驚いた顔を向ける。私は訴えるように彼に言った。

「.....清光、信じてもらえないかもだけど、あれ、あの子供、私！ あれ、子供の頃の私だよ！」

動転する私と清光が言葉を交わしている間に、少し離れた場所に、いつの間にかひとりの青年が立っていた。

彼は風に一筋だけ長い髪をなびかせ、しなやかな動作で迷わず子供の頃の私に近づいていく。

その姿、あれは、あのひとは、

「.....もしかして.....あれ、俺?!」

そう、少し離れたところに立つ青年は、「加州清光」そのひとだった。

黒と赤が印象的な戦装束を身にまとった加州清光が子供の頃の私に近づいていく、という現実離れた光景を、私たちは呆然と見つめていた。

誰よりもたいせつな愛する刀を亡くした女性は、それは嘆き悲しみました。

泣いて泣いて、涙が枯れ果てるほど泣いて、その悲しみは天まで届くかと思われるかのようでした。

周りの者たちは懸命にそれをなぐさめました、自分の目の前でいとしい者を亡くした女性に、笑顔を取り戻すことはできませんでした。

あまりに大きな悲しみは人らしいところまで涙と共に押し流し、笑うことも、怒ることも、そしていとしいものの喪失を嘆き泣くことすら忘れさせてしまいました。

そして女性は、審神者ではなくなりました。

生家へと戻された女性は、まるで抜けがらでした。

しかし、その身に宿るちからは衰えることなく強いままであったので、一族の者たちはそこに価値を見出してくれる先へと嫁がせることにしました。

それは、愛どころか、人らしいところをまったく介さない、利用し、されるだけの取引でした。女性がずっと夢みていた晴れがましい日の白い装束は、もっとも愛する者に見せるためにまとう筈であったのに。

しかしもう、そんなことすら、女性は思い出すことはできませんでした。

そのころは、完全に死んでいたからです。

嫁ぎ先は、女性の家と釣り合いの取れる古さの、しかし女性の家とはまた違う、ある特殊なすべをもって栄えてきた一族でした。

彼ら一族は代々そのすべを守り継承してきましたが、決してそれを使おうとはしませんでした。それは使うためのものではなく、存在することに意味があるものであったからです。

そのすべを悪しき目的に利用されないよう、外部へともれ出ないように守り伝えていくことが、一族に課せられた使命でありました。

彼らは長きに渡り、善のころをもつてそれを成し遂げてきました。

秘密を守るための盾となり、密かに未来へ伝えていくために。

女性の夫となったのは、先代より当主の座を継いだばかりの男でした。

善なるころを持つ者ばかりの一族にあって、男は「異端」でした。

男は幼き頃より、長きに渡り秘めてきたすべを、ただ守り伝えていくことでは満足しませんでした。

みずからが持つそれを、他者に対して使いたいという欲求を人一倍つよく持っていました。

しかし、周りの大人たちはそれを諫めました。

——これは、使うためのものではない。

——誰かを押しつけ、踏みつけるためのものではない。

子供の頃より幾度もそう諭され、叱られ、ときには打たれて、考えを改めるようにと言われつづけるうちに、いつしか男は口先だけうべなうことを覚えました。自分の欲と野望を隠すことを覚えました。

それらは男のこころの奥深くに巣食い、来たるべきときを待ちながら男と共に成長していきました。

やがて歳月は流れ、自らの名ばかりの伴侶となった女性と会ったとき、男は思いました。

——時は来たれり。

天は我に味方した。

この女のちからがあれば、そのちからさえあれば、

.....きっと長年いだいてきた望みを叶えることができるであろう、と。

どこからともなく現れた「加州清光」は、迷いなく子供時代の私と思しき子供に近づいた。

「ど、ど、どうする清光……？」

「どうって……このまま身を潜めてるしかないよな、だって、もしあの子供が本当に幼い頃のあ  
るじだとしたら、俺たちが出て行っちゃまずいでしょ、歴史が変わっちゃう。問題は俺たちよ  
り——」

言葉を切った清光が黙って指を差す。

その先には、もうひと振りの加州清光。私はごくりと喉が鳴った。

「も、もしかしてこれって、歴史改変の現行犯なんじゃないの……？ あれ、あの加州清光って  
、歴史修正主義者サイドの刀剣なのかも」

「そーは言ってもさ、俺たちまで乱入しちゃったら、余計に事態を混乱させるだけだって……  
でも、こっそり聞くぐらいはしとこっか、少しでも状況を探らないと、この先どうしたらいいか  
も判断できないし」

そうつぶやいた清光は、私の手を握ると静かに移動し始めた。さいわい風が吹いており、さやさ  
やとなる草のおかげで、そういうことに慣れない私が立てる音はうまく誤魔化せているようだ。  
視界を遮る大きめの樹を利用してうまく死角に入り込めた私たちは、注意深く耳を澄ませた。

「……今は忘れちゃうけど、このことはちゃんところが覚えてるから」

そう言った身元不明の加州清光は、自分の心臓あたりをとんとんと人差し指で示した。

「ここ？」

真似して、子供の私が自分の左胸をぽんぽんと叩く。

それを見てやさしげに微笑んだ加州清光は、

「そう、そこ。大事なものをしまっておくところ。そこに、俺がしるしをつけたから。約束、忘  
れないように」

と言い聞かせるように告げる。

「わたし、約束ちゃんと忘れないよ？」

そう言って、子供の私が頬をふくらませる。

——あれ……この会話……うっすらだけど覚えてる……？

「だーめ、今は忘れなきゃ。でもさ、そのときが来たらちゃんと思い出せるから。そーゆー風に  
しといたから。だーかーら、それまでそこに大事に取っておいて、ね？」

「うん、やくそく！」

——無邪気に小指を差し出した私に、彼はまたやさしげに笑ってゆびきりしてくれて……

「約束。次に会ったとき、俺が会いに行ったとき……俺のお嫁さんになるって」

「およめさん」

「そう、お嫁さん。そのときまで、ちょっとの間さよならだね」

「……………」

「そんな寂しそうにしないでよ、連れて行きたくなっちゃうからさ。ね？　お願い」

「……うん」

「いい子。じゃあまたね、必ずまた会いにに来るよ……きっと、思ったよりもずっとすぐに」

——そう、お嫁さんにしてくれると、言ったのだ。そして……約束をした。

必ずまた、会いに来ると。

「うわ、なにアイツ、いくらちっちゃいからって俺のあるじをお嫁さんとか、ふざけてんだろ」

「——ねえ清光」

私のそっとささやく声に、憤った様子をつぶやきを漏らしていた清光が目で聞き返してくる。

「私……今の場面、覚えてる——ってというか、どうして今まで忘れてたんだろう……」

「え？　あるじ？」

清光が私に手を差し伸べ何かを問いかけようとして、不意に厳しい表情になり視線を移した。

その先にはもうひと振りの加州清光が立っており……彼の紅い瞳はこちらを向いている。

「……?!　見つかった？」

私がそうつぶやいた瞬間に清光は私の手を握って走り出しており、それに引きずられ転がるように私も走り出す。

「ちょ、ちょっと待って清光！　何も逃げなくても……」

転びそうになりながらそう呼びかければ、

「あの場に留まってどうするのさ、アイツと話でもしたいの？」

そう言い返されて返事に困ったそのとき、不意に足が空を切った。

「……?!」

踏み出した先は本来あるべき地面がなく、私は為す術もなく落下していく。そして、必死の形相の清光がこちらへ手を伸ばしたのが見え、

——ブラックアウト——

男は、名ばかりの妻に、そのちからや生家に伝わる術の秘密を明かすよう、ことあるごとに迫りました。

しかし、生ける屍と化した妻はそれに応じることはついぞなく、そもそも男の言葉すら聞こえていないようでした。

妻はいつも自らのこころのなか、思い出のなかに生きていました。

その傍らには、うしなわれてしまった筈のいとしい刀が常に寄り添い、やさしい愛の言葉をささやいているかのようでした。妻はいつも夢みるような瞳で、なにもない、誰もいない自分の隣の空間を見やっては、ときに微笑んだりなにかを言ったりするのですでした。

それが気に食わない男はたびたび妻を罵倒し、ときに打ち据えましたが、妻の目が男を認識し、映すことはありませんでした。

それは、一方的な行為によって妻の身にあたらしいのちが宿ってからも、変わりませんでした。

やがて月が満ち、不幸な星のもとに生まれてきた赤子は女の子でした。

生まれながらにして哀しいさだめを負った、不憫な娘でした。

誰よりも自分を愛し守ってくれる筈の母は、娘にひとかけらの関心も払いませんでした。

母に見捨てられた娘は、一族の用意した乳母に育まれ、愛されることを知らずに成長しました。長じるにつれ、彼女がつよいちからと素晴らしい素質をもって生まれた子供だということがわかりました。

——何代かにひとり生まれる強力な能力者。

その肩書きは、娘の人生における不幸を決定的なものとしたのですでした。

娘がものごころがつく頃、母が亡くなりました。

自らいのちを絶ったその左小指には、いつも片時も離すことのなかった襟巻の、紅い糸が結び付けられていました。

彼女は、とうとう夫、そして娘と言葉を交わすことはありませんでした。

最期までその愛は、こころに住まういとしい者にしか向けられることはありませんでした。

少女へと成長した娘は、母ゆずりのちからを色濃く受け継ぎ、その才は抜きん出ていました。

政府から通達がきたのをさいわいに、父から逃げ出したかった娘は審神者となるために家を出ました。

そして、修行を経て本丸を与えられ、審神者となり、初期刀として加州清光を選びました。

——母がこころから愛した、紅い瞳のうつくしい刀を選んだのですでした。



目を開けると、見慣れた天井が目に入った。

「あ、あるじさま！ よかった……！ ぼくがわかりますか？」

顔に影が落ち、泣きそうな顔が私を覗き込んでくる。

「……今剣？ ここは……？ 私、どうやって……」

起き上がろうとするのを止められる。

「あるじさまと加州は、がけからおちたのですよ！ でも、うんよく、とびでていたえだにひっかかって。きをうしなっているところを、みんなでひきあげてつれかえったんです」

さいわい、どこもけがはないみたいですけど、あんせいにしてないとだめですよ、と今剣は親のような顔で私に言い含めた。

「枝に……？ そんな筈は……私と清光は下まで落ちて、洞穴に入って、入り口が崩れて……そうだ、指笛！ 今剣、私の指笛きこえた？ 何度も頑張って吹いたんだけど」

そう口にする私を今剣は眉をひそめて覗き込むと、

「あるじさま……？ だいじょうぶですか、きをしっかりとってください、きをうしなつたあるじさまが、ゆびぶえなんてふけるわけがないでしょう、薬研をよんできます」

と慌てて部屋を出てゆく。出しなに、あたまをうったのかな、という独り言が聞こえた。

その後、皆とこんのすけの勧めで政府管轄の病院で検査を受ける羽目になり、どこも異常なしとの結果をもらいやっと本当に落ち着いた頃には、崖から落ちて数日が経っていた。

ようやく人心地ついた私は、午後の執務室で清光と茶を飲みながら話をしていた。

話題は当然、先日の出来事についてである。

「……やっぱり、どう考えてもあの野原でのことは夢だと思えないの。だって、私だけならともかく、清光もしっかり覚えてるんだよ？ もし仮に頭を打ったとか何かしらの理由で見た幻覚だったとして、同時にまったく同じ内容のものを見るなんて通常では考えにくいし」

そう力を込めて語る私の言葉に、清光が頷く。

「ま、そのことについては俺も同意見だけど。でもさ、それはそれとして、俺たちは崖の途中で引っ掛かってたからこそみんなに助けってもらえて、こうして無事に本丸に戻れた、ってのも事実なんだよな……」

もう何度か繰り返したこのやりとりは、いつもそこで止まる。今回も例に漏れず、私たちはうーんと唸って考え込んでしまった。

「もし、私たちが行ったあの場所が本物の過去だとしたら、私はこうして審神者になるずっとずっと前から、『加州清光』って刀剣男士を知ってたってことになるのよね」

「だって、あるじはそのことを覚えてた……っていうか、思い出したんだろ、そう言ってたじ

ゃん。なら何で今まで忘れてたのかって問題があるけど」

「それなんだけど」

私は顔を上げて、清光を見た。

「あのとき、どこかの加州清光がそれに関係してるようなこと言ってたよね」

そう、あのとき。あの小さい白い花が咲き乱れる野原で、幼い頃の私に彼はたしかこう言ったのだ。

——だ一め、今は忘れなきゃ。でもさ、そのときが来たらちゃんと思い出せるから。そ一ゆ一風にしといたから。だ一か一ら、それまでそこに大事に取っておいて、ね？

そして、こうも言っていた。

——じゃあまたね、必ずまた会いに来るよ。

必ずまた会いに来るよ。

「.....そんなこと言ってたっけ？　なんかすっごい不埒なことを言ってたのは覚えてるんだけどさ」

「うん、言ってたんだよ。私、それも思い出したんだもの」

そう答え、私は更に言葉を続ける。

「ねえ清光、もしも私たちの経験が実際にあったことなら.....って、私は絶対にそうだって思ってるけど、あの『加州清光』は、いずれここに会いに来るんじゃないかな」

そう真面目な顔で語った私の頬を、少しむくれた清光が両サイドから押しつぶした。うぎゅ、と変な声が出て、口がタコのように尖ったブサイクな顔になる。

「.....なんで私はこんな目に遭ってるんでしょうか」

恨みがましい目でそう問いかければ、清光はしれっと

「あるじが縁起でもないこと言い出すからじゃん。まさかと思うけど、アイツに会いたいとか、ほんのちょっとでも思ってたりにしてないよな？」

と半目で私を覗き込んだ。

どきり。

そう左胸が立てた音は、清光に気づかれなかつただろうか。

.....実は、ほんの少しだけ思ってる。あの「加州清光」に会ってみたいと。

でもそれは決して、清光に後ろめたく思うような感情からでなく、私は聞いてみたいのだ。どうして幼い私に会いにきたのか。

そして——どうしてあんな約束を交わしたのかを。

けれど、私はそんな考えを胸の奥に隠し、「してない」とふてくされた声で答えた。

「ほんとーに？」

まるで嘘を見破ろうとするかのように覗き込んでくる紅い瞳がきれいで、後ろめたいことはないと思っているのに、目をそらしたくなる。その僅かな返事へのためらいを認めた清光が私を問い詰めようと口を開いたのと、騒々しい足音が廊下をやってきたのとは、ほぼ同時だった。

誰かが来たとわかると清光はぱっと手を離し、

「うるさいよ！ ……なに、どーしたの、なんかあった？」

と不機嫌そうに廊下へと声をかけた。少しホッとして清光から身を離れた私の耳に、

「おい、主に会ってえって野郎が来てるぜ！」

というやや興奮した声が聞こえた。

はじめての刀、加州清光。

最初にして唯一の、選ばれた刀。

彼は、娘に笑うことを教えました。

彼は、娘にさみしさを教えました。

彼は、愛を知らずに育った娘に、誰かをたいせつに想うことを教えました。

——そして互いに「失う怖さ」を、囮らずも教え合うことになったのでした。

審神者となって日が浅い頃、はじめての刀とあるじはふたりきりでとてもしあわせでした。

審神者となってしばらく経った頃、仲間が増えた本丸で、変わらずはじめての刀とあるじはしあわせでした。

審神者となってだいぶ経ったある日、あるじの父から家に戻ってくるようにと書かれた文が届きました。

あるじは、それを拒みました。

あるじは、それが純粋な帰省とはならないことがわかっていたのです。

帰るよう指定されたその日は、一族が「成人」と認める年齢に達する日——あるじの生まれた日でした。

その日を迎えることは、これまでたがを嵌められていたちからが開放されることを意味していました。

父が、私をただ祝うために呼ぶとは思えない。

きっと良からぬたくらみがそこにあるのだろう。

そう、あるじは思いました。

しかし、その呼び出しに抗うことはできませんでした。

父である男は、自身の政府への影響力をちらつかせ、本丸の刀たちを盾に取ることで、娘を無理やり呼び寄せたのです。

久方ぶりの生家に戻ったあるじを出迎えた父は、禍々しさを全身から発しながら、歪んだ笑みを浮かべました。

おぞましいたくらみが露わになったことで、あるじはもう男を父と思うのをやめました。

そして、ちからの限り抵抗し、自らのちからを利用されることを拒みました。

思うようにならない娘にたいそう怒った父は、実の娘に呪いを放ちました。  
その悪念は深く、あるじは声と光とを奪われました。

一瞬でままならぬ身と成り果てたあるじを連れ、はじめての刀は必死に逃げました。  
それはまるで、古い物語のようなさまでしたが、その中の女のように露を見ることは、あるじにはもうできませんでした。

——どこぞの加州清光が、あるじに会いに来た。

そのセンセーショナルな出来事は光の速さで本丸中を駆け巡り、客刃を通した部屋の周辺は、瞬く間に姿を隠すつもりのない野次馬で鈴なりになってしまっていた。

本丸へ誰かが訪ねてきたのは初めてであるので、そのことで皆が騒然となるのは、まあ無理もないことである。

しかし、此度の場合はそれに加え、訪問者の発言が問題であった。

どこかの加州清光は、門前に立ち案内を乞う際、こう言ったのである。

「俺の花嫁はどこかな、紅藤べにふじに会いたいんだけど」

紅藤。

それは、本丸のあるじである審神者が、生まれ育った家よりもらった通り名である。かの家において、審神者の才があると判明した者に授けられる色から取られた呼び名だ。

とはいえ、それを呼ぶのは血縁者と一部の親しい者だけだ。そうそう気安く明かすものではないので、必然的に知る者は限られる。

そのため、その名を外部の——それも本丸の刀たちがまったく面識のない者が口にすることは、驚愕に値することであった。

しかし、刀剣たちをどよめかせたのは恐らくその点よりも、その前に発せられた言葉にあった。

「俺の花嫁」

訪問者は、確かにそう言ったのである。

「あれが、あるじさまのいいなずけをかたる、ふととぎものですか！」

開け放たれた障子の影から、部屋を覗き込みそう憤慨するのは今剣で、その声は聞こえても構わないと思っているらしき大きさだ。それをまあまあと宥めるのは堀川国広で、その後ろには今にも部屋に怒鳴り込んでいきそうな和泉守兼定が控えている。そしてもう片側には、おずおずと、もしくは興味津々で覗き込む粟田口をはじめとした短刀たちがおり、その保護者たちが何か騒ぎが起こったときのためにと少し離れて控えている。出遅れて居場所が確保できなかった者たちは、裏手にある格子窓から覗くことにしたらしい。

純粋な興味、何かが起こるのではないかという野次馬根性、そして殺気とさまざまな感情が入り乱れカオスと化しつつある室外とは裏腹に、出された茶を涼しい顔で飲む客刃の加州清光は落ち着いたものだ。

そんな中にあるじがやってきたものだから、周囲の興奮は頂点に達した。

皆が口々に、客刃とはどこで会ったのか、嫁になるという約束は本当なのかとかしましく問いた

だすのを情けない顔で見たあるじは、「後でちゃんと説明するから」と小さな声で言い含めて部屋へと向かう。その隣には、もちろん恋びとである加州清光が硬い表情で付き従っている。入室してきた本丸のあるじを見た客刃は、ぱっと表情を明るくし、次いでとても懐かしいものを見るように目を細めた。

「紅藤……！ おっきくなったねー、でもちゃんと小さい頃の面影があるよ……こんな可愛くなっちゃってるなんて反則でしょ」

そう言って立ち上がった客の加州清光は、部屋に入ってすぐの所で戸惑っていたあるじに近寄ると、いとしそうにぎゅうと抱きしめた。

「なっ……！ ちょっとお前、何してんだよ離れろよ！」

声を上げた恋びとの加州清光が密着したふたりを引き離そうとする。それを腕の中のあるじごと機敏に交わした客刃は、

「——これまでこの子を守ってくれたことは礼を言うよ、『この』加州清光。けどさ、悪いけどこの子は俺のものだから。お前に出会うずっとずっと前から、この子は俺のだってしるしが付いてんだよな」

と口を端を引き上げた皮肉そうな笑みで言い放った。

「ちょっと待ってください！ なに言ってるんですか、彼は——この加州清光は、私の恋びとです！ 確かにあなたとは小さい頃に約束をしたかもしれないけれど、それはまだ色んなことがよくわかっていなかったときのことで……けど、今の私の大事なひとはこの清光なんです！ 勝手なこと言わないでください」

必死に腕の中から逃れようとしながら、あるじがそう訴える。

部屋の外はといえば、早くもこれ以上ないくらいに騒然となっており、中へ踏み込もうとして止められている刀が幾振りかいる。そして、目の前で恋人に無体なことをされた加州清光が、顔を蒼くして射殺いころしそうな眼光で客刃をにらみつけている。

しかし、その騒ぎを引き起こした元凶である加州清光は、笑みさえ浮かべる余裕でその様子を面白そうに見回した。そして、その視線をひたりと目の前の同類に向けると、

「へー、恋びと、ねえ……じゃあ、いちおー好き同士ってこと？ でも残念だけど、その『好き』はお前に向けたものじゃないよ、加州清光。それは——俺のためのものだからさ」

と当然のことを説明するかのような口調で告げた。

その言葉に腕の中の抵抗はより激しさを増し、対峙する刀は紅い瞳に明確な殺意を漲らせ、廊下ではいつでも割って入れるよう幾振りかが身構えた。

「……何それ。妄想もそこまでいくと怖いしキモいよ？ 大体、まだ何もわからない年頃のあるじに約束を迫るとか、やり方がせこすぎない？ っていうか、いい加減その手を離せよ……お前さ、ここがどこだかわかってんの？ よその本丸に来といて、そこのあるじを拘束するとか頭おかしいだろ」

激しい怒りを押し殺したその口調にも招かざる訪問者は怯むことなく、むしろ楽しそうに言葉を返す。

「さっきから随分と強気だけどさ、お前、自分がほんとに好かれてると思ってんの？ ……じゃ、教えてやるけど——」

そして、ゆっくりとくちびるを舐めると、ささやくように言葉を継いだ。

「お前がこの子に選ばれたのは……俺と同じ『加州清光』だったから。俺のことを無意識に慕うこの子のところが求めた、『俺の代わり』ってやつ、なんだからさ」



声と光を失いながらも、刀のあるじは気丈にたたかい続けました。

その敵は、かねてよりの宿敵である、歴史修正主義者の差し向ける時間遡行軍、そして——自らの父親であった男でありました。

自分たちのあるじの身に何が起こったのかを察した一部の刀たちは、懸命にその身に巢食う悪しきものを調伏しようと試みましたが成りませんでした。

からだの自由は奪えても、こころの自由が奪われることはない。

あるじはそう微笑んで彼らを慰め、密かにある準備をはじめました。

やがてあるじは、満を持して父であった男に闘いを挑みました。

しかし力及ばず、利用できないのであれば生かしておく価値はない、と今度は命をじかに脅かす呪いを身に受けてしまいました。

それはかよわいその身をつらぬき、いのちのろうそくを大幅に削り取りました。

かくなる上は、とあるじは決意を固めました。

あるじは、愛する恋びとでもある最初の刀を枕元へ呼び寄せ、ある頼みを伝えました。

それは、とてもとてもかなしい、さいごの願いでした。

そして——

それからはもうめちゃくちゃだった。

本丸の加州清光が抜刀し、同様に抜刀して最初の一閃をいなそうと客が構え、斬りかかろうとした初期刀を抑える者あり、客の前に立ちふさがる者あり、あるじは取り乱して泣き、あるじを避難させるための刀が部屋に飛び込み、座卓は引っくり返され座布団は飛び、茶はこぼれて湯呑みが畳に転がった。

すべてが何とか収まったとき部屋の中はそれは惨憺たる有様で、唯一の幸運は、歌仙兼定の目利きで購入された高価な客用湯呑みが割れなかった、ただその一点のみであった。

本丸においての法度である抜刀、そして刃傷沙汰に及ぶ寸前だった初期刀・加州清光は罰として本体取り上げの上で隔離され、客刃である加州清光も身を拘束されて一室へ閉じ込められた。それらが済んだ後、古参である刀たちが顔を揃え、今後の対応についての話し合いがもたれた。しかし、訪問者の目的や素性が明らかでなく、また、どうやらあるじとは旧知の仲らしいことが、彼らを躊躇わせていた。

肝心のあるじはといえば、あまりに動揺したことで心身ともに調子を崩して寝込んでしまっている。

本来であればこのすけを通じ政府へと報告すべき事態だが、昨年末の騒動も記憶に新しい今、また悶着があったとなれば、痛くない腹を探られることになるやもしれない。

それにより政府に目をつけられるなど、あるじに都合の悪いことになりはしまいかという懸念が二の足を踏ませていた。

「——とりあえず、今回の騒ぎは僕たちの胸におさめ、まだ外部へは知らせない方がいいだろうね」

ため息と共に出了歌仙の言葉に、その場にいる皆が頷く。

「まずは主君の回復が第一ですね。それから事情を伺い、その上で対処を考えるのがよいのではないのでしょうか」

控えめに前田藤四郎がそう述べ、薬研藤四郎が現時点での体調を報告する。更に、大和守安定がふた振りの加州清光の様子について話した。

「あるじさまはどこにふせ、げんいんとなったおとこはもくひ、こいびとであるかたなはふてくされているとは、まったく、はためいわくなさんかくかんけいですね！」

今剣が、身も蓋もない言い方で嘆いた。

「まあ、そんな言い方をするものではないよ、主にしたって、まさかこんなことになるとは思っていなかったんだろうしね.....あの子とうちの刀はともかく、問題はあの加州清光だろう。一体どこの刀なんだい？」

歌仙にそう問いかけられた大和守安定が首を振る。

「一応、訊いてはみたけど、話すつもりはなさそうだね。まあ、無理やり口を割らせることもできるけど、主はそういうの嫌がりそうだからなー」

「まだどこの刀ともわからんからな、手荒な真似はしない方がいいんじゃないか」

安定の物騒な発言に、薬研が釘を刺す。

結局、しばらく顔を突き合わせて話し合ってもこれといった考えは浮かばず、一同は床についている主が回復するまで現状を維持することで合意し、それぞれの持ち場へ散っていった。

\*\*\*\*\*

加州清光は、大和守安定の声で顔を上げた。

「主が呼んでる」

陰鬱な気分のまま立ち上がれば、ずっと同じ姿勢でいたせいで体が強張っているのに気づく。突然の訪問客を巡って、本丸はじまって以来の大騒ぎを起こしたのはもう何日前のことだったか。頭を冷やせと隔離されてからはひたすら物思いに沈んでいたため、日にちの感覚が曖昧になっておりわからなかった。

その間はずっと、昔なじみで同室の安定があるじの様子をはじめとしたあれこれを知らせに来てくれていたが、清光の頭の中はある物思いで占められており、なにを聞いても——それこそ、最愛のあるじの容態でさえ——上の空に通り抜けていくように思われた。

「……あるじ、元気になったんだ」

ぽつりとそう問えば、安定は呆れた顔をした。

「昨日の時点でそう言ったはずだけど。お前さ、いい加減しゃきっとしなよ。本当にアイツに主を取られちゃっても知らないぞ」

その忠告とも励ましとも取れる言葉に、清光は薄く笑ったきりで言葉を返さなかった。

先導されて歩きながらも、その胸中にはこのところずっと渦巻いているある想いばかりが浮かぶ。

——あるじは、本当に「俺を」選んでくれたのかな。

どこかの加州清光が自信たっぷりにささやいた言葉が、どうしても頭から離れない。

考えまいと思っても、繰り返し繰り返し浮かんでくるその言葉を清光は振り払えずにいた。

「お前がこの子に選ばれたのは……俺と同じ『加州清光』だったから。俺のことを無意識に慕うこの子のところが求めた、『俺の代わり』ってやつ、なんだからさ」

——違う、俺は誰かの代わりなんかじゃない。俺はあるじの「はじめての刀」で、あるじの「

一番」で、誰よりも愛されている「恋びと」。

いきなりやってきたやつに何を言われようと、それは揺るがない事実だ。

でもさ、でも、もし……あるじが俺にアイツを……それこそ意識しないくらいずっと深い、この底にある面影を重ねていたとしたら。

自分でも気づかない内に、俺にアイツの影を見ていたとしたら。

それだけじゃない。

もし、あるじが俺を好きになってくれたのが、ただ単に「最初に会った刀」だったからだとしたら。

俺がどう頑張っても手に出来ないものを持った刀が、ここにはたくさんいる。

いくら可愛くしていても、どんなに努力しても、手に入れられないものを持つ刀はたくさんいるんだ。

俺が勝っているのは、きっと「過ごした時間の長さ」だけ……。

いや、そんなことないよな、あるじはそんな女の子じゃない。あるじと俺はどこか似ているところがあって、俺はあるじのいいところを見つけてはそれを教えて励まして、あるじはそれに応えて俺を受け入れ、好きになってくれた筈だ。

そうして、二人三脚でやってきたんだ。

だから、あるじの気持ちを、愛情を疑うなんて間違ってる。

……そう思うのに。

——なんで、こんなに胸がざわつくんだよ。

歩きながら自分の中に沈み込んでいた清光は、不意に立ち止まった安定の背にぶつかった。

気がつけばもう審神者用の寝所の前で、役目は終わったとばかりに清光を残して安定が去っていく。仕方なく障子越しに「……あるじ？」と声をかければ、中から「入って」と手短かな返事が聞こえた。

数日ぶりに見た恋人は疲れた顔をしていた。泣いていたのか、目のふちが赤らんでいる。

元気になったと安定は言ったが、それは全快したという意味ではなかったようで、まだ布団は敷かれたままになっており、枕元には薬湯が入っていたと思しき湯のみが置かれている。

「……清光、大丈夫？ ひどい顔してる、どこか痛いのか？ 具合が悪いのか？」

心配そうに自分の名を呼び訊ねる声はいつもと変わらなくて、彼はなんだか泣きたい気持ちになった。

「俺なんかより、あるじの方がよっぽど大丈夫じゃなさそうじゃん……体、平気なの？」

そう問い返してそばに寄った清光とそれを迎えたあるじは、どちらからともなく抱きしめあった。

「——清光、ごめんね、本当にごめんね、私のせいでこんなことになっちゃって……」

泣き出した恋人のからだを、清光はぎゅうと腕の力を強めてその身に密着させた。泣いているせいか、それともまだ熱が引いていないのか、やわらかいそれは常よりも熱い。その体温と感触はまるでふたりきりの夜を思わせて、清光は自分と恋人との間にあるつながりを確認し、少しころが落ち着く心地がした。

——あんなことをするのもできるのも許されてるのも、俺だけだ。

胸の内をつぶやいたその言葉は、浅ましいながらも彼をととても安堵させた。

そうして少しでも不安を薄めようとする事自体、何よりも己が恋人の気持ちを信じていない証左であることを、彼はまだ気づいていない。

恋人たちは少しの間、黙ってそのままでいた。

やがて互いの体温が交じり合って同じくらいになった頃、そっと身を離れた清光は、

「……アイツ、どうしてるの」

と小さい声で訊いた。

「部屋に閉じ込められてる、って……安定が。何を持っていっても食べないし、水さえ飲まないって」

その声に混じる心配そうな調子に、たちまち戻ってきた不安、そしてどす黒い嫉妬が清光の胸を痛めつける。

「別にいいじゃん、アイツがどうなったってさ。あるじ、あんなことがあってもそうやって心配するのって、ただやさしいだけ？ それとも何か別の感情があるからじゃないの？」

思わず責める口調になった恋びとの言葉に驚いて目を見開いたあるじは、

「……そんな言い方……」

と言ったきり、その後が続かない様子だった。それに苛立った清光は、更に言葉を重ねる。

「大体さ、この間のことだって、あるじが警戒心なさすぎなのがいけないんだろ？ あんなやすやすと抱きしめられたりしてさ。ほんとは、そんなに嫌じゃなかったんじゃないの、なんせ相手は昔から知ってる『王子様』で『許婚』ってやつだし？ アイツの言ったこと、あながち間違っていないんじゃないかって……思っちゃうよな」

今度こそ、あるじは言葉を失ったようだった。

「……なんで何も言わないの」

追い討ちのようかけられる言葉にも、悲しそうにうつむいたあるじは答えない。その目にみるみるたまった涙が、音も立てずに一滴、こぼれて落ちた。

「否定しないの、俺の言ったこと……もしかして凶星ってやつ？」

泣きながら黙って首を振った恋人は、なおも涙を流し続けている。

さすがに罪悪感が湧いた清光は、そっと指先で頬の涙をぬぐうと、

「ごめん……言いすぎだよな、泣かないで、あるじ」

と顔を覗き込んだ。

そのまま、くちびるが重なる。久しぶりのそれは、不調を示すように乾いてかさついた感触だった。

「——で、どうするの、アイツのこと。もしこのまま何も話さないようなら、もう政府へ引き渡しちゃってもいいんじゃないの」

そう問うた恋人に、少し顔色を悪くし悲壮な顔をしたあるじは小さな声で、しかしはっきりとこう述べた。

「あのひとには……しばらくここにいてもらおうと思うの。訊きたいこともたくさんあるし——でも、それだけじゃなくて……そうすべきだと思うから」

刀は、あるじの最期の頼みを、とてもとてもつらい気持ちで領きました。

ほんとうは行きたくない、  
もう先の見えたいのちであるならば、どうか尽きるまでそばに、  
そのいとしいからだから、いとしいたましいが離れるまで、どうかそばに、  
——そして、自分もまた、ともに逝きたいと、

けれど、こころの内にあるその願いを、刀は口にすることができませんでした。  
なぜなら、己の恋人が、どれだけの悲壮な覚悟をもってその頼みを口にしたのかが、痛いほど  
わかったからでした。  
そして、彼女もまた、ほんとうは、ほんとうのほんとうは、最期まで刀のそばにいたいと、そ  
う願っていることを痛いほど知っていたからでした。

それでも、自分たちはそうしなくてはいけない。  
どんなに離れがたくとも、どんなにこころが泣き、傷つき血がほとぼしろうとも、  
.....守らねばならないものは、ある。

この手を離れたなら、別離のあいさつを交わしたなら、  
きっともう二度と、会えることはない。  
愛する者のいのちが消える瞬間、その手を握って別れを告げることも、なきがらにすがって泣く  
ことも、もうできない。  
遠い場所から、そっとたましいの安寧を祈る、それしかできない。  
それがわかっている、刀は——

別れるとき、刀はその目にいとしい人を焼きつけました。  
手を離せばもう会えない、清廉でかなしい、その人を。  
もうこの身を見ることも、その涼しい声で自分へと愛を告げることもできなくなってしまった、  
その人を。

遠い遠いところへ旅立つ刀の紅い瞳には恋しい人が棲んでいて、いつでもその面影は刀とともに  
あり、ただしいことを、そうあるべき世を夢みて、ともに旅をするのです。  
悲しいことが起こらぬよう、悲しみが続いていかぬよう、旅をするのです。  
——終わりの、そのときまで。

「あのひとには……しばらくここにいてもらおうと思うの。訊きたいこともたくさんあるし——でも、それだけじゃなくて……そうすべきだと思うから」

自分の恋人から発せられたその言葉を、清光はすぐに理解することができなかった。いや、耳には届いていたのだが、それを理解したくないと頭が拒否していた。

「ごめん、あるじ……今、なんて？」

彼はそれが何かの間違いであることを祈るような気持ちで、そう聞き返した。

——しかし、その答えが望むものへと変わることはなかった。

その日より、清光は彼女を避けるようになった。

近侍を命じられてもそばに上がらず、日々の生活でも近くに寄ろうとせず、幾度も話し合おうと歩み寄る彼女を無視し続けた。

それは傍で見えていてもあからさまかつ大人気ない所業で、歌仙をはじめとした刀たちがそれとなく、もしくは真っ向から意見をしたが、態度が改まることはなかった。

一方、突然やってきたどこかの加州清光はといえば、未だ自らの身の上を明かすことなく本丸に滞在していた。さすがに飲食はするようになったが、自身の身元や訪問の目的などは依然だんまりを決め込んだままだ。

彼は自分が悶着の種になっていることを自覚しながらも、どこか他人事のような醒めた目で事態を俯瞰しているように皆には見えた。

その身柄については、本丸内で政府へ報告すべきとする向きと秘すべきという意見に分かれており、結局はこれといった結論が出ないまま棚上げとなっていた。何より、あるじが彼の滞在を黙認している以上、それを押し切りどうこうしようというのも憚られたのだ。

あるじは、恋人が自分を厭い近寄ろうとしない理由を重々わかっていながらも、よそ者である加州清光を追い出そうとはしなかった。

そして、それは日が経つうちにあらぬ憶測を呼びつつあった。

「——ねえ、ちょっといいかな」

ある憂鬱な雨の午後、執務室を訪ねたよそ者の加州清光にそう呼びかけられたあるじは、泣きそうな顔で振り向き、すぐにしょんぼりとした表情へと変わった。

慕わしい声に、恋人の怒りが解けて会いに来てくれたのかと思ったのである。

しかし、その淡い期待は、訪ねてきた者の瞳を見て儚く消えた。



「どうされたんですか、加州さん」

沈んだ面持ちで落胆を隠そうとせずにそう答えたあるじを見て、加州清光はひとつ息をつき、仕方ないなどとも言いたげな視線を向けた。

そして、許される前にずかずかと部屋の中に入ってくると、彼女の前に腰を下ろした。

「気持ちはわかるけど、そーやってあからさまに態度に出されると、さすがにちょっときつい...  
...よな」

その言葉にわずかに目線を上げたあるじは、

「.....褒められた態度でないのは自覚してますけど、そうなるのは誰のせいだと思ってるんですか」

と負けじとため息をつく、疲れた顔に真剣さを漂わせて

「私、もう限界です。そろそろ話してくれてもいいんじゃないですか——あなたがここに来た...  
...私に会いに来た理由を」

とまっすぐ相手を見据えた。

どちらの言葉も途切れた少しの間、振り続く雨が立てる音が静かな室内に満ちる。

今は昼餉後の食休みの時間で、天気の良いので外で遊ぶ者もなく、また命じた近侍が姿を見せないこともあり、辺りには誰の声も聞かれない。

彼女はたとえ自分の前に現れなくとも恋びとを近侍から外そうとしないので、日々の業務の進み具合は芳しくなく、連日おそくまでひとりで仕事をこなすその顔には、濃い疲労の色が見てとれた。

「理由.....ね。それについては今さら話す必要もないでしょ、君はずっと前から知っている筈だし、改めて言うことなんて何もない」

静けさを破ったのは加州の方だった。

その返答に、疲れきった様子で彼女は口を開いた。

「.....あなたは、本当に私を娶るつもりでここへ来たの？ 違うでしょう？ こんなことを言うのは自分でも恥ずかしいけれど、あなたからは私への気持ちが感じられない。それに何より、なぜそんな約束を過去の私と交わしたのが.....まるでわからない」

そして、深いため息をひとつ挟み、更に言葉を継いだ。

「遠回しに言っても仕方ないので率直に訊きますけど.....あなたは歴史修正主義者サイドの刀剣なのですか」

その質問に、初めて加州清光は感情らしきものを見せた。

まず少しだけ目を見開いて彼女を眺め、そして最初はくすくすと、やがて声を上げて笑い出したのである。

「.....笑い事じゃないと思いますけど！」

そう怒りのにじんだ声を上げた本丸のあるじを楽しそうに見やった加州清光は、ずいとはずいとは一歩にじり寄り寄って彼女との距離を詰めると、

「ごめんごめん、その方が話としては面白いかもだけど、でも違うなー。俺は歴史修正主義者とは縁もゆかりもない。むしろ、やつらを憎んでる側……かな。それにさ、もし俺がそっち側で、歴史改変を目論んで過去の君と接触したとしても、あんなかわいい紅藤を攫ったりできないよ……だって可哀想じゃん」

「真剣に訊いてるのに茶化さないで！」

思わず声を荒げたあるじから視線を外した加州は、そっと左胸に手を当て、

「……俺の、……の……だから」

と雨音にまぎれそうな小さな声でつぶやいた。

「——え？」

しかし、次の瞬間に顔を上げた加州の顔には先ほどの心許ない雰囲気は微塵もなく、不遜な笑みを浮かべると

「だから何度も言ってるじゃん……君を迎えに来たんだって。俺のお嫁さんになってくれるんでしょ？」

とささやきながら、腕づくで抱き寄せた。

「……ッ！ やめて！ こないだあれだけの騒ぎになったの忘れたの？ 離して！」

そう必死にあらがうのを難なく押さえ込み、腕の中にしっかりと閉じ込めた刀は、

「ねえ、アイツとうまくいってないんだろ？ もうきっぱり見切ってさ、俺にしちゃえばいいじゃん……同じ加州清光だしさ、俺だって、アイツに負けなくらい君をたいせつにできると思うよ？ 誰かがちょっとつついたくらいで崩れる関係なんて、もともと大したもんじゃなかったんだって」

とささやきかける。

「あなたに何がわかるのよ！ 私と清光はね、一緒に色んなことを乗り越えてきたの！ 彼は私のはじめての刀で、一番の刀なの！ 絆があるの！ あなたみたいに、自分の主を放ってよその審神者にちょっかい出しに来るような、そんな適当な刀じゃないんだから！」

腕の中から半泣きで紡がれた言葉に、加州の表情が変わった。

しかし、胸板に顔を押し付けられている彼女はそれを見ることはできなかった。

しばしの沈黙の後、ゆっくりと夢みるようにうつくしい紅い目を伏せた加州清光は、

「……絆、ね」

と含みのある口調で復唱した。

「——ねえ紅藤、教えてあげるけどさ、ほんとのそういうのってそんな軽いもんじゃないよ。ちょっとの横槍でダメになっちゃうような、そんなちゃちなもんじゃない……それってさ、哀しいほど強くて、あんまりにも正しくてうつくしくて泣きたくなるような……それの前にはすべてが無になっちゃうような、それが愛、そして絆ってやつだよ。君とあの刀はさ、おままごとみたいなもん。子供同士が、恋人ごっこで遊んでるようなもんだよ。そんなんじゃ」

そう言い差し、加州は少し腕を緩める。その隙に必死に逃れようともがく様子に少し笑った彼は

、「——悪いけど、とてもあんなやつになんか任せられないよな」

と、爽やかに言い切った。

「ねえ、俺が会いに来た目的が知りたいって言ったでしょ」

腕の中で身を硬くしているその耳に、彼はそっと言葉を吹き込んだ。

「遠いところからこうやって会いに来たのはさ、紅藤のしあわせと未来を守るため……なんて恥ずかしくなっちゃうようなこと言ったら、信じてくれる……？」

そこで言葉を切った加州清光は、返事がないのも構わずにふ、と笑うとこう付け加えた。

「——だって王子様って、そういうものでしょ？」

旅に出た刀は、あるじに言い含められた通り、遠い場所へと赴きました。

それは、遠い遠いところ、

そして、「はじまり」が存在するところ。

たどり着いたのは、小さく白い花がたくさん咲いている原っぱでした。

そこには、ちいさいおんなのこがいて、花のかんむりを懸命につくっていました。

おんなのこは不機嫌でした。

なぜなら、せっかく両親に連れられて親戚のうちへ遊びにやってきたのに、やさしい笑顔で歓迎してくれるはずの男の人も女の人も、いっしょに遊べると聞いていた同じ年ごろのおんなのこもいなかったからです。

.....ずっと前から、約束をしていたはずなのに。

約束をまもらないのは悪いことだ、とおんなのこはきつく教えられていました。

なので、こうして訪ねてきたのにいないのは、とても悪いことだと憤慨しました。

そして、親戚のおんなのこを遊べないのがとてもつまらなくて、ふくれていたのです。

おんなのこを連れてきた両親は、訪ねた家に誰もいないのを知って、顔色がわるくなりました。

それも、おんなのこは気に入りませんでした。

顔がまっさおになった両親は、まず玄関をがちゃがちゃとし、あちこちの窓の鍵をたしかめ、覗き込んで中のようすを見ると、どこかへ連絡をしなければいけませんでした。

そして、それからは、おんなのこが何を言っても相手にしてくれませんでした。

「だいじな話をしているから、あっちで遊んでなさい」

と言われました。

「.....みるちゃんのばか」

おんなのこは、手に白い花をもったまま、そうつぶやきました。

だれかの悪口を言うのは、とてもいけないこと。

そう知っていましたが、あんまりつまらなくて、ひとりで放っておかれているのが悲しくて、ついに言わずにいられなかったのです。

「みるちゃんも、みるちゃんの父さまも母さまも、どこ行っちゃったのかな.....」

べにふじが遊びに来るのは知っていたはずなのに。

今日は、あたらしいおうちへ引っ越したみるちゃん一家のお祝いをするようになっていたのでした。

みるちゃんとその父さま母さまは怖い人たちに追いかけていて、その人たちから隠れるためにお引越しをしたのだと聞いていました。

「.....もしかして、怖いひとたちが来て、それでどこかに行っちゃったのかな」

そうつぶやけば、おんなのこは怖くなりました。だから、怖さをどこかへやるために、違うことを考えました。

「でも、もしかしたら、『王子様』が迎えに来たのかも？」

かなしいつらい目にあっているおんなのこを、ひどいことから助けるせいぎの味方がいることは、物語で知っていました。

「王子様」というのは、きれいで、かっこよくて、泣いているおんなのこをひどい場所から連れ出すために、白い馬に乗って迎えに来てくれるのです。

——それなら、今のわたしだって、こんなつまらなくてかなしいんだから、来てくれてもいいのに。

そんなことを考えたときでした。

さあっと風が吹いて、顔にかかった邪魔な髪をちいさな手でかきやったおんなのこは、目の前に誰かが立っていることに気がつきました。

黒い靴のつまさきを見て驚いたおんなのこは、あわてて自分の前に立つ誰かを見上げました。

するとそこには、黒くてひらひらと長い裾のコートをまとって、黒い髪に紅い瞳の、とてもきれいなおとこのひとがいたのです。

つけている耳飾りが、おひさまの光を反射してきらきらとゆれました。

おとこのひとは、なめらかな動作でおんなのこに手を差し出しました。

その爪は瞳と同じ紅でいろどられていて、おんなのこはそのひとが「王子様」だと確信しました。

だって、これまで一度だって、こんなきれいなおとこのひとを見たことなんてありませんでしたから。

きっと、やくそくを守ってもらえなかった、そんなかわいそうなわたしを迎えにきてくれたんだ、とおんなのこは思いました。

それから、おんなのこは王子様とやくそくをしました。

明日の、そのまた明日の、もっとずっと先の明日まで、忘れてるけど覚えてる、そんなやくそくを。

「……お前、何やってるんだよ」

唐突にそうなじられ、清光は不機嫌も露わに言葉を発した安定の顔を見上げた。

「言っただろ、このままじゃアイツに取られちゃうかもしれないぞ、って」

そう続けられる言葉に、清光は目を伏せて自分の爪を見ながら

「……なに、あるじがどっかの俺といちゃいちゃしてんの見ちゃったとか、そーゆー話？」  
と平坦な口調で問い返した。

彼が恋人を避け始めてから、もうだいぶ日が経った。

その発端は、彼女がどこの誰ともわからない刀を本丸に滞在させると言い出したことで、清光はもちろんのこと、他の刀たちも驚き、その理由を知りたがった。

しかしいくら訊ねても「そうした方がいいと思うから」の一点張りであった。

清光は幾度も根気よくそれについて訊ね、素性のわからないよそ者を匿うことの危険性について説いたが、彼女の意志は固く、話は聞くものの頑として意思を翻そうとはしなかった。

その強情さに失望し、また、そこまで頑なに傍に置きたがる理由を邪推せずにはいられなかった清光は、いつしか胸の内にどろどろとした感情を棲まわせるようになり、恋人から遠ざかるようになったのである。

そんなわけで、こここのところずっと、彼は冷たい態度を通してきた。

悲しそうに瞳を揺らして自分を追いかけてきたのを無視したことも、一度や二度ではない。可哀想な仕打ちをすると、少しだけ溜飲が下がるような気がしていた。

自分が傷ついた分を少しお返しできたような、歪んで甘えた満足感があった。

それによって誰よりも大事な筈の恋人が悲しそうにすることにすら、暗い悦びを感じていた。

あるじにああいう顔をさせるのも、悲しませるのも自分だけである、というような、優越と独占欲が混じった暗い感情をもって。

「お前さ、もう主のことはどうでもいいのか？」

そのいつもより低い声にようやく清光は顔を上げた。

思った通り、自分に向けられた青い瞳には明確な苛立ちが揺れている。

「……何が言いたいわけ？」

そう返した紅い瞳に、安定は思わずといった態で声を荒げた。

「だから！ お前がそうやって素直にならずにいるから、主が……ッ」

そこではっとした顔をした安定は、一呼吸置いて先ほどとは打って変わった静かな声で続けた。

「……………なんでもない。まあ、彼女には彼女の人生があるし、もしそれでお前が泣くことになっても、僕は主がしあわせならそれでいいからね」

それだけを告げ、清光を一瞥してその場を立ち去ろうとするのを、清光は思わず呼び止めた。

「待てよ、あるじが……どうしたって？」

かけられた言葉に、ちらとわずかに振り向いた似た者同士の喧嘩仲間は、

「——執務室で、アイツと抱き合ってた」

とだけ言い捨てると、今度こそ足早にその場を立ち去った。

\*\*\*\*\*

「……なに？」

振り向いた自分と同じ姿の刀を、清光は忌々しそうに見つめた。

その刀は、本丸にやってきたときからそうであるように、特に何をするでもなくただ空を眺めていた。

あるじの意思により政府に知らせずに滞在が許されているこのよそ者が、どこから何のためにやってきたのかを、清光はもちろん、本丸の誰も知らない。

——もしかしたら、あるじだけは知っているかもしれない。

その考えは清光の胸を焼き、じくじくとした生々しい痛みを与えた。

「あのさー、用がないならどっか行ってくんない？ 俺、お前に見つめられても嬉しくもなんつともないからさ……あの子ならともかく」

そうつまらなそうにかけられた言葉にカツとなり、思わず言い返す。

「あの子……って、あるじのことかよ。お前、なんであるじに近づこうとしてんの？ っていうかさ、いい加減どこから来たのか、目的はなんなのか言えよ。みんなの温情でここにいられるくせに、黙秘とか生意気だろ。そんなことが許される立場だと思ってんの？ 大体、戦いもしないやつを養ってやるような筋合いも、うちにはないんだよな——その刀は飾りかよ」

その言葉に顔を上げ、ゆるりと笑んだ底知れぬ気味悪さに、清光は眉をひそめた。

「温情をかけてくれてんのは……みんな、じゃなくて紅藤だろ？ あの子がそう望むから、俺はここにいる。それだけのことだと思うけど？ とやかく言われる筋合いはないし……それに、お前はもう戦線離脱したんだとばかり思ってたけど」

言葉の消えたしじまに、内番の者たちの賑やかな声が懐かしい記憶のように遠く聞こえる。

まるで鏡を挟んだようなふた振りの刀は、片方の表情が歪み、もう片方が余裕めいた笑みを浮かべていることで、それが光の反射で作られされた像ではないことがわかった。

「で？ もう一度きくけど、わざわざ俺に何の用？ さっき言ってたみたいに、俺の身元その他

を問いただしに来たわけ？ それとも、紅藤に近づくな、とでも警告に来た……とか？ あははっ、それさー、俺に言ってもしょうがない？ それを決めるのはあくまであの子なんだし……それにお前、随分とあの子に可哀想なことしてるみたいじゃん」

謎めいた訪問者は、そう言って馬鹿にしたような視線を向かい合う同じ姿の刀に向ける。そして、ゆっくり待って反論がないのを確かめたのちに、

「別にそれはそれでいいと思うよ、俺はさ——お前があの子の手を放すなら、それが一番いいと思ってる。ちょっとしたことで揺らぐような、ほんの少しの行き違いで信じられなくなるような、そんな脆弱な繋がりであの子を縛り付けられるのは……迷惑だからさ」

と、まるで切っ先を突きつけるように告げた。更に続けて、

「もうこの際だからはっきり言うけどさ、お前みたいに頼りない刀に、あの子は預けらんない…身を引きにくくない？ 男らしく潔く、さ。そーゆーのは早い方が傷が浅くて済むだろ」

それは、その刀の独擅場だった。

言われている側である清光は、何の反論もできないまま、屈辱的ですからある提案を聞かされていた。

何も言い返せなかったのは、少なからずこれまでの自分のしたことに罪悪感を持っていたことと、まるであるじと深く強いつながりを持っているかのような、自信にあふれた言葉に圧倒されていたからだ。

それはとても説得力を持っていて、「いくら冷たくしようと、あるじは自分のことを好きでいてくれるだろう」という密かな自信を激しく揺さぶり、崩していった。自分とあるじが歩んできたこれまで——初期刀として彼女のもとに降り立ち、共に泣き、共に笑い、惨敗した夜には手入れ部屋で泣きじゃくるのを慰め……そういうあたたかい思い出が、そしてふたりだけしか知らない秘密が、とても薄っぺらで脆いもののように思われてきた。

——違う、俺とあるじとのつながりは、そんなちゃちなもんじゃない。

そう反論したかったのに、それは口から出ることなく、ころもへと戻っていった。

結果として、初期刀である清光は、ただただ黙って言われるがままになっていた。

その様子をつまらなそうに眺めたよそ者は、

「ねー、なんにも言うことないわけ？ つつまないなー、張り合いないじゃん。まさかさ、ほんとのほんとに『その程度』のもんだったわけじゃないよな？ だとしたら、俺、ちょっとお前を許せないんだけど……なんなら、この刀が飾りじゃないって証明してやってもいいくらいにはさ？」

そう言いつつ、大股で距離を詰め至近距離で覗き込んでくる。

紅い瞳と瞳が対峙する。ようやく、清光が口を開いた。

「殴りたければ殴ればいいし、斬りたきゃ斬りゃいいじゃん。抵抗しないでやられてやるからさ……どーせ、俺がどうなったって、あるじは気にもしないだろ——こんな、あんたの代理品



の刀なんかさ」

言葉が終わるか終わらないかで、胸倉が無言でつかみ上げられる。

それでも、されている方は抵抗しようという素振りには微塵もない。

「そーれーがー、ダメだっつってんだよ、お前さ、ほんっとに卑屈でわがままで甘ったれでどーしよーもないね。お前みたいなと同じ刀だとか、ほんっと耐えられないんだけど.....あるじと初期刀の絆、舐めてんの？ そんな適当な覚悟でこれまで紅藤の傍にいたってわけ？」

しかし、揺すぶられても、弁解も反論も出てこないのを見て取ったどこかの加州清光は、馬鹿にしたようにひとつ鼻で笑うと、強くつかんだ身を突き放した。無防備な体が地面に投げ出される

。

「あっそ.....反論すらできないわけ。じゃ、遠慮なく好きなようにさせてもらうから」

そんな捨て台詞にも、地面を見たままの刀から言葉が返されることはなかった。

刀とあるじの話 玖

——あるじへ。

これから毎日、あるじへ手紙を書くよ。

絶対に届かないってわかってるけど……届ける手段だってないけど、それでも、あるじに話しかけていたいからさ。

そうしてれば、あるじがそばにいるような気になれるから。

そんなの自己満足だろって自分でも思うけどさ、それでもいいんだ。

いつかこの書き付けた言葉が消えてなくなる日がきても、俺の気持ちは、こころは、留まって残る。

そしていつか、遠い遠い旅の果てにあるじの元へ届くんじゃないか……そんな風に思えば、この狂いそうな寂しさも、ひどく胸が痛むのも、まだ耐えられるように思うんだ。

あるじは、こんな俺を感傷的だって笑うかな。

それでもいーよ。

どんなきっかけでも、それが俺に呆れてのことでも、いつだって、俺はあるじに笑って欲しい。

もう二度と会えなくても、その手に、頬に、くちびるにふれられなくても、

——たとえ、そこに俺がいなくても。

あるじが笑うことができるなら、それが俺の一番のしあわせ……だからさ。

\*\*\*\*\*

——あるじへ。

彼女にあったよ。

まだほんとにちっちゃくて、すごく可愛くてさ……どことなくあるじに似てる、って思った。

もしかしたら、ああいう年頃の女の子は似て見えるものなのかもしれない。

俺は小さい女の子をこれまで見たことがないから、比較しようがないし、わからないんだけどさ

でも、不機嫌そうな顔をしているときの眉とか、引き結んだ口元とか、つむじがふたつあって前髪のセットが難しそうな生え方をしてる、なんて変なところも、すごく……懐かしく感じたんだ。

ああ、やっぱり……ってね。

ねえ、あるじ。

俺、あるじが望むことをきっと果たすって約束をしたらろ。

もちろん、その気持ちは今でも変わってないし、これからも変わる事なんてあり得ない。

いつだって俺は、あるじの味方だからさ。

あるじが望むなら、何でも……それこそ、世界を敵に回してだって、それを叶えてあげたい。

けど、まだ幼いあの子を実際に見て思ったんだ。

もっといい方法があるんじゃないか、って。

もっとずっとしあわせなやり方があるかもしれない、って。

だから、ねえ、あるじ。

俺に任せてもらえないかな。

俺、自分なりにいろいろ考えてみたんだ……うまくいくかはまだわかんないけど、でもきっと、あるじが満足してくれるような、笑顔を見せてくれるような、そんな結果にできるんじゃないかって思う。

更になんかしみを増やすより、憎しみを重ねるより、もっといいやり方で。

だから、ちょっと予定を変更したよ。

出会った野原で、女の子にしるしをつけて、約束をしたんだ。

未来に続く約束。

俺とその子がまた会う約束。

こっちにとってはすぐでも、彼女にとっては長い年月を隔てることになるし、その間は俺に会ったことも話した内容も忘れてるだろうから、きっと次に会ったとき、あの子は俺を怪しむだろうなって思う。

拒絶されたらどうしようって思う反面、なぜか受け入れてくれるって気がしてる……何の根拠もないんだけどね。

事後報告でごめん、でも、これまでの初期刀としての働きと恋びととしての愛情を思い出して、信じてて欲しいな。

きっと、あるじの望みは果たすって約束するからさ。

あの子さ、俺のこと「王子様」って言ってたよ。

あんなちっちゃい子の言うことなのに、俺、なんだかちょっとドキドキしちゃってさ。

それはきっと……あの子にあるじの面影を重ねていたから、なんだよな。

ねえ、あるじ。

俺さ、あるじがあの女の子くらいだった頃を、見てみたかったな。

ちっちゃいあるじの可愛い手を引いて散歩したり、今日みたいに花の冠をかぶせてあげて、お嫁さんごっこしたりさ。

……そう、ごっこでいいからさ、

あるじと、結婚式の真似事、してみたかった。

——なんて、ごめん。こんなこと言われたって、あるじきっと困るよな。

だから今のはナシ。

聞かなかったことにしてよ。

って、手紙に書きちゃってからそんなこと言うのも変だけどさ。

やっぱ俺、あるじに気持ちを知って欲しいって思ってるから、ついこんなこと書きちゃうんだろ  
うなって思うよ。

もう叶わないことってわかってるけど、それでも、それでも俺は、

あるじを、お嫁さんにしたかった、から——

——夜が長い。

そんなことを思うのは、どれだけぶりだろう。

眠れない夜、ただもやもやと不安が広がるばかりで一向に眠気の訪れない、苦しくいたずらに長い夜。

こんな状況になるまでは、私の隣にはいつもいとしいぬくもりがあった。

さみしさからも、肌寒さからも、悪い夢や危険からも守ってくれる、誰よりも強い信頼を寄せている刀がいた。

だから、どんな夜だって怖くなかった。

どんなときだって、寒くなかったのだ。

外はしとしと雨が降っている。転落事故の直後に縁起が悪いと早々に戻された景趣は、暦に合った梅雨空だ。紫陽花がうつくしく咲き、雨のしずくを滴らせている、きれいで、少し憂鬱で、薄暗い眺め。

夜の雨は感傷的にさせる。

その、かすかな音がしていることがより引き立てる静けさと、むっとまとわりつくような湿気、そして雨と土のにおい。

それらは、このところずっと目交まなかいから離れない相手のことを、よりいっそう恋しくさせる。

——きよみつ。

そっと、その四文字をくちびるに乗せてみる。

なによりもおいしい、四つの文字の組み合わせ。

もう随分と、ちゃんと呼べていない気がするその名前。

どうしてこんな——彼との距離が空いてしまうようなことになったのか、それは私自身が一番よくわかっている。

そう、すべては私のせいなのだ。

過去で出会い、約束を交わした昔なじみの「加州清光」を、何の説明もなくずっとここへ滞在させていること。

それが、どれだけ恋びとを苦しめているかはよくわかっている。

……でも、ダメなのだ。

どうしても、あの刀をここから追いやることができない。

そうしようと考えるたび、こころの奥底……いや、本能とでもいうような深いところが「それを

してはいけない」と警告を発するのだ。

それはとても強い力で、私の「でも……」に続く主張を押さえ込んでしまう。

そしてまた、私自身もそうすることが恐らく一番の「正解」であるのだとどこかで知っている。

突然にやってきたあの刀を遠ざけてはいけないと。

——たとえ、恋びとがそのことに苦しむとわかっていても。

清光には、幾度もそのことを説明しようとした。

納得してもらえる自信はなかったけれど、それでも話だけでも聞いてほしい、決してあなたを苦しめたいわけではない、かの刀に特別な感情を抱いているとか、そういうやましい気持ちからのことではないのだ、と弁解をさせて欲しかった。

しかし、清光はそれを徹底的に避け、取り付く島もない態度を貫いている。

……当たり前だ、清光が怒るのも、私に呆れてしまうのも。

逆の立場だったとしたら、私だって絶対に平静ではいられないし……今、感じている以上の不安と心細さに耐えきれないだろう。

こんなことを思うのすら、おこがましいと自覚はしている。

けれど、清光が苦しんでいる原因が自分だという事実に、いつだって胸が苦しい。

もしこのまま互いの距離が広がり続けて、こうして離れていることが当たり前になって……いつかつながりが消えてしまったら。隣に彼がいないことが普通になってしまったら。

そんなのは嫌だ、耐えられない、そう思うのに、どうしたらいいのかもわからない。

きゅ、と自分で自分の手を包む。

左手の薬指に光るものは、それを贈られたときと同じ輝きであるのに。

今、こころは擦れ違って、暗い闇の中をさまよっている。

今夜も見つからない答えを探して、私の意識はただよう。

とても不安で、つらくて、かなしくて、

——ただひたすらに恋しい。

「……きよみつ」

私は、答えがないとわかっていながら、また甘いその四文字をつぶやいた。

返ってくるのは、雨の音ばかり……

で、あった筈だったが、今宵は違っていた。

「——呼んだ？」

そうささやいて断りもなしに開く障子を、私は呆然と見つめていた。

「……こんな時間に、何の用ですか」

警戒もあらわにそう訊ねる私に、どこかの加州清光はくすくすと楽しそうに笑った。

「そんな怖い顔しちゃって……かわいいね」

そして、衣擦れの音もなく傍に寄ると、私の顔を覗き込んで

「紅藤が来て欲しがってたから、こうして来たのにさ……俺のこと、呼んだでしょ？ ちゃんと聞こえたよ」

これまでの経験から学習し、すぐさま遠ざかろうとした私より早く腕を捕らえた加州清光は、

「この間は悪かったって、だからそんなに警戒しないでよ」

とすまなそうな顔をした。

少しの間をおき、それ以上の接触をしてくるつもりがなさそうなので、しぶしぶ元の位置に座りなおす。

「ありがと、紅藤はやさしい子だね」

そう言って笑んだ顔を見て、私の脳裏に幼い日の野原がよみがえる。

そういえばあのときも、今と同じ目で彼は私を見ていた。

やさしいのに、かなしそうな、そしてこちらを見ているのに、どこか遥か遠くを見ているような、そんなまなざしで。

「……やさしくなんてないです、ちっとも。それより、どうしてこんな時間に訊ねてくるんですか？」

「そりゃ、男がこんな夜更けに、なんてひとつしかないでしょ……って、嘘うそ、嘘だって！ そんな怖い顔しないでよ。ま、そーゆー顔もかわいいけどさ。冗談はそのくらいにして、今夜は紅藤に大事な話があつてさ」

私は居住まいを正した。

この刀が改まってする話といえば、身の上や訪問の目的にまつわることを以外にないだろう。それは私だけでなく、本丸の誰もが知りたがっている事柄である。ようやく、それを打ち明けてくれる気になったのか、と私は真面目に聴く姿勢に入る。

「なんでしょうか、どうぞ、話してください」

加州清光はひとつ頷くと、同等の真剣なまなざしになると口を開いた。

「紅藤、あの加州清光と別れてよ、できるだけすぐに」

——あるじへ。

はるばる遠くまでやってきて、こうして毎日、何をするでもなく過ごしてるとき、色んなことを思い出すよ。

刀剣男士として顕現させられてから、こんな風に穏やかな時間を持て余すことなんてなかったし、こんなに何かをずっと考えたのも初めてだから、かな。

これまでたくさん色んなことがあった筈なのに、やっぱり俺はあるじのことしか考えられなくてさ。

初めて会ったときのこととか、初めて一緒にごはんを食べたこととか、初陣から帰ったときのこととか……もう、どこからこんなに湧いてくるんだよってくらい俺の中はあるじでいっぱい、あるじのことしかなくて、きっと俺のからだを深く斬り裂いたら、あるじとの思い出とあるじへの気持ちがほとぼしって、それ以外には何も残らないんじゃないかって思う。大げさかな、でもほんとにそう思うんだ。

だって、あるじは俺のすべてだからさ。

あるじが、俺の世界のすべてで、俺の何よりも大事なものなんだ——今も。

この世の何を敵に回しても、何に逆らっても、俺にとって大事なものは、あるじのしあわせなんだ。

……だからこそ、こうして旅に出た。そして、ここにいる。

ねえ、あるじ。

俺、ここの加州清光と話をしたんだ。

そいつは——同じ刀だと思いたくないくらい頼りなくて、強い意志も愛情も見えなくて、正直すっごく失望した。

こんなのが俺なのかよ……って。こんな刀が、約束をしたあの子の初めての刀で、恋びとなのかよって。

俺は許せないんだ。

自分が傷つくのが怖くて、いとしい人を試そうとしたり、簡単に手を離そうとするあいつが。もちろん、俺のことがショックだったんだろうってことはわかる。

俺の存在が信頼関係にひびを入れて、恋びとたちの間に溝を作ってしまったってことも。

でも、でもさ。

そんなもんなのかよって思うじゃん。あの子とあいつは俺とあるじと同じで然るべきなのに、そうでなければいけないのに、こんなに呆気なく壊れそうになっちゃうなんてさ。

……目の前が暗くなりそうになった。あるじが俺に託したことの重大さを、改めて再認識したって気がした。そして——このままじゃダメだって思った。



だからさ、俺はあの子とあいつのつながりを断ち切ろうと思う。

できれば、そんなことしたくないよ。そうせずに済むようになって、ここに来る前に願ってた。

でも、しょうがないよな。

それがあの子のためなら、そしてその先に続いていく未来のためなら、俺はどんなに憎まれても、すべきことをするだけだし……それがあの子のためになるって信じてる。

もうすぐ。もうすぐ「約束の日」はやってくる。

あの子のこころをできるだけ守ってやるための見極めは、正直、俺には荷が重いよ。

ほんとは今でもまだ迷ってる。

どちらがいいのか。

どちらの選択が正しいのか。

ねえ、あるじ。

俺さ、今すっごく、あるじに会いたい。

あるじにそっと頭を撫でてもらって「大丈夫だよ、清光」って言われたい。

でもそれは、

——決して叶わぬ夢、ってやつなんだよな。

あるじ……。

「……今、なんて？」

私はそう問い返さずにいられなかった。

「加州清光と別れて、って言った、できるだけ早く。なんなら今すぐにでも」

しかし、私の淡い期待も虚しく、目の前の刀は同じ内容を言い方を変えて繰り返した。

「確かに、行き違いがあって今ちょっとうまくいってないですけど、部外者であるあなたにそんなことを言われる筋合いは——」

「あるんだって。紅藤にはないように思えたとしても、俺にはある。だからさ、頼むよ、むちゃくちゃ言ってるってのはわかってるよ、けどさ……昔のよしみで、どうか言う通りにして欲しい。俺、紅藤の王子様でしょ、絶対に君のためにならないことなんてさせない。こうして約束を守って会いに来た俺に免じてさ、どうか聞き入れてよ」

そう一息に告げた紅い瞳は、それが冗談でもなんでもないことを如実に表していて、私の混乱は更に増した。

「ちょっと待ってください、話が……話が見えません。どうしていきなり私と清光の話になるんですか」

すると、彼は目を伏せしばし言葉を探したのちに、

「……あいつは、君にふさわしくない、から」

と静かな声で言った。

「紅藤は、もっと大事にしてくれる男と一緒にいるべきだろ、深く愛してくれて、何があっても決してその手を離さない、君のためならどんなことだって叶える強いところを持った……そういう男と、しあわせになって欲しいんだ」

「——清光は、そうじゃないって言いたいんですか？ そんなことありません！ あなたは彼のことをよく知らないからそんな風に見えるのかもしれないけど、清光は私をととても大事に……してくれて……私を好きでいてくれてる……はず、です」

強く主張したかったのに、こころと裏腹に自分の口から出る声は尻すぼみに小さくなり、自信なげに響いた。

「紅藤がそう思いたい気持ちはわかるよ……すっごくさ。でも考えてみてよ、君が元気になってからさ、あいつとどれだけ話した？ こうして俺が紅藤に近づいてるのに、馴れ馴れしくするなって怒ったのって初対面のときだけじゃん。いくらやきもち焼いてへそ曲げるって言ったってさ、どこの馬の骨ともわかんない刀が恋人に言い寄ってるのに、何もせずに平気な顔してる男っておかしいだろ？ ……それ、紅藤も気づいてるんじゃないの」

それは、私の痛いところを的確についた指摘だった。

気づきたくない、考えたくない、でも目をそらすには大きい問題でもあった。

「これまでの君たちがどうだったかは俺は知らない。もしかしたら、君の言うように、あいつは

いい恋びとだったのかもしれない。けどさ、今はどうよ。っていうか、肝心なのは今なんじゃないの？ いくら過去にいいやつだったからって、今がひどいことへの擁護にはならない。むしろ、今がひどいなら過去がいくらいい恋びとだったとしても、そんなの帳消しだ」

反論できずに黙っている私を気遣わしげな目を見た加州清光は、

「俺はさ、紅藤……君にしあわせになって欲しいんだよな、誰もが羨む、なんてレベルじゃなくて、普通のありふれた、でもあったかいしあわせを手にして生きていって欲しいんだ。互いに好き合い大事にし合って、ずっと長い年月を手を繋いで歩むような、そんな相手と生涯を共にして欲しいんだ。それは君のためだけじゃなくて……俺のためでもあるんだ。俺は君のしあわせが何よりの望みなんだ、だからさ、お願い……あいつのことは忘れて」

と必死に訴えかけると、やや潤んだように見える紅い瞳でまっすぐこちらを見つめ、

「もし……君が他のやつを好きになるなら、俺は全力でそれを助けてあげる。『お嫁さんになって』って約束は、紅藤があんまりかわいいからつい出ちゃった冗談だったけど……もし君が望むなら、俺があいつの代わりになったっていいって今は思ってる。紅藤があいつを忘れられるまで、どこまでも傍にいるから。なんだって叶えてあげる。だから、お願い……」

と私の両手を祈るように包み込み、ひたいにそっと押し当てた。

「お前……何が目的だよ、あるじに取り入って、何しようとしてんの？ 大体さ、お前の主は何してんの？ 自分の刀剣がフラフラよその本丸に来てさ、おまけに居ついてんのに放置とかどんだけ薄情で図々しいんだよ。せめて、どこから来たかだけでも明かせよ、怪しすぎるよ、お前」

その刀が本丸に来てすぐの頃。俺はアイツにそう詰め寄ったことがあった。

そのときは、まさか事態がここまで長引くとは思っていなかったから、ちゃんとした答えを期待しての問いかけて感じではなくって、あまり変な気を起こすなよって釘を刺すくらいのつもりだった。

すると、俺と同じ姿をしたそいつは、

「……未来から。いや、過去から、かな。ま、どーでもいいじゃんそんなことは」  
とうすら笑った。

「——どーでもいいわけないだろ、俺、お前のこと、マジで信用してないからさ」

「ま、当然だよな。でも、あの子には俺のしるしがついてる。それは揺るぎない事実だからさ。気持ちはわかるけど、男のヤキモチってみっともないから、ほどほどにしといた方がいいんじゃないん？」

俺はどうしようもない男だ。

いや、刀だ。

……違うか、どうしようもない恋びとだ、かな。

あー、たぶんそれが一番しっくりくるな。

加州清光。

あるじのはじめてにして一番の刀。

この本丸において、唯一あるじに選ばれた刀。

そして、あるじと想いが通じ合った恋びと。

……「だった」って、もう言うべきなのかな、認めたくないけど、そう思いたくないけど。

でも俺は、あるじに失望されても仕方ない男だ、ってわかってる……。

——こうしてウジウジしてる間にも、アイツにあるじを奪われちゃうかもしれない。

そうわかってるのに、何もできない、意気地なしでどーしよーもない男。

「こんなじゃあ……愛されっこないよな……」

つぶやきは、昨晚から降り続けている雨の音にかき消されそうに儂い。

あるじと出会って、気持ちが通じ合って、大好きなあるじが自分のものになったっていう満足感と嬉しさを忘れてた思い。

……もう、とっくになくなったと思ってた。

愛されないことへの恐怖、なんて。

こんなにも不安定なのは、こころが揺れ動くのは、あるじがアイツを「受け入れた」からだ。

俺以外の刀を——それも、俺と同じ「加州清光」を、あるじは受け入れた。

素性も何もわからないのに、ろくに警戒もせずに。

その事実がとてつもないショックだった。

取って代わられる、そう思った。

別にアイツは戦に出るわけじゃない。あるじのために何もしてない。

——それなのに必要とされてる、なんてさ。

じゃあ俺は何なんだよって。

これまで、いのちを懸けてあるじに勝利を持ち帰ってきた。

あるじのために、あるじが何も心配をしなくても済むように、いつも笑っていられるように。

それだけを考えてやってきた。

いつだって、あるじの一番は俺でありたかった。あるじが一番に必要とする存在でいたかったんだ。

ほんとは……あんなやつ、すぐに放り出して欲しかった。

「私には清光がいるから」って、ちゃんと言って欲しかった。

でもさ、ここまでこじれてしまった以上、もう前みたいに戻ることは難しいよな。

俺だって、合わせる顔なんてない。

俺は——加州清光はどこにだってたくさんいて、必要ないって思われちゃったら、いつでも「どこの俺」に取って代わられてもおかしくない存在で。

あるじにとってかけがえのないひと振り、そうなれるよう願ってて、実際そうだったと思ってたけど、それはもしかしたら、俺だけの思い込み、俺だけの幻想だったのかも……なんて、笑っちゃうよな。

笑えすぎて……なんか涙でそう。

俺ってほんと——情けない男、だよな……。

……俺はまだ迷ってる。

ふたつの道のうち、どちらを選ぶか。

どちらを選ぶのが正しいのか。

いや、きっとどちらも正しいんだよな。

問題はどちらを選ぶかじゃなくて、選んだ後にどうするか、だよな。

それに……どうするにせよ、それはきっとほんのちょっとした差異でしかない、そんな気がする。

だって俺は、もう既に大きな決断をしてしまったのだし、

——もう引き返すことは、できないんだからさ。

この間、思い切ってあの子に伝えてみたけれど、返事をもらうことはできなかった。

それは予想していたことだけれど、できればあの場で「うん」と言って欲しかった。

そうだったら、今の俺はどんなにか気が楽だったかなって思う。

あの子が望むなら、俺は何でもする。

あの子が悲しむなら、いくらだってそれを慰め、癒すつもりでいる。

もしも……俺に愛して欲しいと願うなら、きっとその気持ちに応えてあげる。

でもそれは——本物じゃない。

それらはどれも、あの加州清光がこれまであの子に与えていたものとは違うんだ。

いくら俺が本気であの子のためを思ってその願いを叶えたとしても、それは遠くの空に逆さに映る船のように、手の届かない実体のないまぼろし……のようなもの。

だから、迷っている。

たとえ不安定であっても、「ほんと」をあげるのが、あの子のためなんじゃないか。

まやかしの愛情なんて、あの子をより傷つけるだけなんじゃないか。

もしも、加州清光を忘れられずに、あの子のところが壊れてしまったら……？

迷いはきりが無い。

でも、俺はもう決めなくちゃならない。

取り返しのつかないことになる前に、この迷いを振り切らなきゃならないんだ。

それが俺がここへ来た目的であり、

——俺の大事な大事なあるじの、最期の願いなんだから。

「もうすぐだね！ 今年は……どうするの？」

庭の掃き掃除の最中、弾んだ気配がしたと思ったら背後からそう話しかけられた。振り返れば、予想通りに桃色がかった金髪をなびかせた乱藤四郎が笑っていた。

「もうすぐって……何がさ」

やる気なくそう答えれば、もう！ わかってるくせに一！ と頬をふくらませる。

「……俺にそんなあざとい顔したってムダだって」

わざと意地悪な物言いをする、そんなんじゃないよ、もう、素直じゃないよね、と更にふくれた。

「じゃあ、言い方を変えるよ。明日は何の日でしょう？」

「……………」

俺は黙って、中断していた掃除を再開する。

「ね～え、加州くん……このままでいいの……？ 加州くんとあるじさんは、こんなあっさりダメになっちゃうような仲だったの？ ボクが協力したのは、こんなふたりを見たかったからじゃないよ……それに薬研だって——」

言葉の終わりを途切れさせた乱は、じっと俺を見つめた。

「そりゃ、俺だってこのままダメになっちゃうなんて嫌だよ、でもさ、どうしようもないじゃん、あるじはアイツを選んだんだろ。無理もないよな、こんな頼りない男なんて、俺が女でも願い下げだって思うからさ。今だって、こうして何もできずにいじけてるだけだしさ……あるじには、俺よりアイツの方が似合ってるって……俺もおも」

ひゅ、と風を切る音がした。

次の瞬間には、頬が熱く、そしてじんじんとし始める。

どうやら、女々しい物思いは、反射神経までダメにするらしい。

目の前の乱を見やれば、その瞳はいつかの安定のように苛立ちと怒りを宿していた。

「加州くん、見損なったよ……ここの本丸にはね、あるじさんのこと本気で想ってる刀が他にもあるんだよ？ でもみんな加州くんならって、あるじさんが本気で好きになった相手ならって、そう思って見守ってきたんだよ！ それなのになんなの？ そうやってひとりで勝手にいじけて……あるじさんの気持ちを一度でもちゃんと聞いて確かめたの？」

そして、俺の左手を強く掴むと、顔の高さまで掲げて揺さぶる。

「この指輪！ ボクが協力してあるじさんとお揃いで買ったこれは、ただの飾りなの？ ふたりの気持ちが結びついたって、もうずっと離れないって……そういう証じゃなかったの？」

徐々に涙声になった乱を見る。その顔は必死で、俺は胸が痛くなるのを感じる。

「——あるじさんがこころ変わりした、って加州くんは思ってるの？ ……なら、どうしてある



じさんは今でも指輪を外さないの？ あるじさん、待ってるんじゃないの？ 加州くんのこと、信じて待ってるんじゃないの？」

去り際に、乱は少し赤くなった目で俺を見ると、

「これ以上、あるじさんを泣かせるなんて、ボクが許さないからね……今の加州くんみたいなひと、ボク大っ嫌いだから」

と言い捨てた。

後には、俺と怪しい雲行き空だけが残された。

——明日は何の日でしょう？

乱の声がよみがえる。

忘れるわけもない、俺だってずっと楽しみにしていた、いっぱいあるじの笑顔が見たくて色々と考えてた……あるじの誕生日、なんだからさ。

その特別な日に、俺はあることを告げようと思ってた。ずっと前から……そう、あのクリスマスの夜からずっと、いつかきっとそうしようって決めてた——真剣で大事なことを、きちんと言葉にしたいって。

……このままいけばそれは、俺の胸の中だけで終わってしまいそうだけど。

——でも、それでいいのかよ。

今日までに、色んな刀からのその言葉を聞いた気がする。

ストレートに言ってきたのは安定や乱だけど、みんなが物言いたげに俺を見てることに気づいてた。

きつと言いたいことは誰も同じで、俺の不甲斐なさにイラついているんだろう。

……だって、誰より俺が、そう思ってるんだからさ。

ああ、今の俺、すごく可愛くないよな……。

目線を落とし、自分の手を見る。

左薬指に嵌まった、あるじとの約束のしるし。

……約束の、しるし。

アイツは幼いあるじに「しるしを付けた」なんて言ってた、そして俺はそれにショックを受けて、勝手に劣等感を抱いてたけどさ。

俺にだって、あったじゃん。あるじへの「しるし」が。そして、約束も。

——想いが通じ合ったあの夜から、ずっとずっとたいせつに守ってきたものが、あったじゃんか。

そう思った途端に、こころに立ち込めていた雲が晴れた気がした。

俺ってほんとバカだ。なんで気づかなかったんだよ。

ほんとに大事なことは、ずっと前から互いの胸の中にあったのに。

これまで育んできたものは、その歴史は、きっと俺たちのこころの中に、確かにあるんだ。

.....もう遅いかもしれないけど、もう呆れられちゃってるかもしれないけどさ、それでも俺、あ  
るじに伝えるよ。

ずっとずっと想い続けてきたこと、そして、今の俺の気持ちも——

## 清らかな光さす祭り

---

本丸中の刀が浮かれている。

よそ者がやってきて以来、本丸に充満していたぎくしゃくした空気を吹き飛ばすかのように、皆が楽しそうに何かしらの準備にいそしんでいる。

それもその筈、今日という日は、刀たちのあるじである審神者の誕生日なのだ。

何かと理由をつけては皆で楽しむのが好きな刀たちは、この機会に気まづくなってしまったあるじと初期刀の仲を修復せんと、密かに企みを巡らせていた。

傍観者である彼らには、今回の一件はとても不可解なものに映っていた。

まず、よそ者があるじが無条件に受け入れていることがわからない。

また、あるじとよそ者の関係性もわからない。

どうやら昔からの馴染みであるようだが、そのことについては当事者たちが語りたがらないのだ。

そして——あるじと初期刀の加州清光、この恋びとたちが果たして今、何を思い、何を考えているのかが一番わからなかった。

「……なあ、黙ってこんなことしちまって、本当にいいのか、乱」

こそこそとある準備をしながら、ぽつりと薬研がそう問うた。

それに顔を上げた乱は、手に持った白いレースがふんだんに使われたものを見つめ、ぽつりとつぶやく。

「ホント言うと……ボクにもわかんない。でもね、このままじゃいけないって薬研だって思わない？ あるじさん、ずっと悲しそうだし、このまま思い詰めて良からぬことを考え始めたらって——」

「めでたい日に、縁起でもないことを言わんでくれ」

そう遮った薬研を、乱は物言いたげに見る。

「ボクはただ……あるじさんに、いつもしあわせそうに笑ってて欲しいだけだよ。薬研だってそうじゃないの？」

それに対し、薬研は少しの間をおいて「……ああ、そうだな」と短く答え、さりげなく視線を外した。

本丸のあるじは、朝、目を覚ました時分から刀たちに色々と世話を焼かれ、普段ではしないようなきっちりした化粧を施され、髪を整えられていた。

皆の楽しそうに浮かれた様子が微笑ましくもあり、また申し訳なくも思っつい表情が曇る。

本当ならば、このめかしこんだ姿を恋びとである清光に見てもらって、彼がくれる大げさで甘い

褒め言葉に照れ笑いする筈であったのに。

私は今、彼がどこで何をしているのかすら知らないのだ。

——もしかしたら、もう私となんて顔を合わせたくないのかもしれない。

そう思えば涙が込み上げてきそうになり、せっかくの化粧を台無しにしないよう、あわてて目を見開いて耐える。

そのとき背後で空気がざわついたように感じ、そっと鏡越しに背後を確かめた彼女は、恋しい姿を認めてあわてて振り向いたが、それは待ち焦がれている恋びとではなく「よそ者」の刀であった。

周りからの「まだ支度中だから外せ」やら「よくも凶々しく顔を出せたな」などの非難をまるで聞こえないように無視したよその加州清光は、真剣な形相で彼女の前に膝をついて向き合った。

「紅藤、誕生日おめでとう……最後のお願いを伝えにきたよ」

彼はそう切り出すと、より一層かしましくなる周囲の非難をものともせず、言葉を継いだ。

「——今日は何があっても、俺の傍にいて欲しい。今この瞬間から、俺は君から決して離れない。だから君も、俺から離れずにいて欲しい。どうか約束して、紅藤。お願いだから。もうこれっきり、困らせるようなことを言ったりしたりしないから。頼むよ」

そう頭を下げた恋びとと同じ姿をした刀は、彼女の答えを待たずにがっしりと手を繋いできた。

「それが君のため……いや、俺が、君にできるたったひとつのことなんだ。この手を——決して離さないでいて欲しい。そうしたら俺は、どんなことがあっても君を、君のしあわせを、そして……未来を、守ってみせるからさ」

しん、と場が静まり返った。

よそ者の爆弾発言のせいか、と手を取られた彼女は思ったが、すぐにそれは違うのだと理解した。

からだの一部に、これまで経験したことのない、突き刺されるような痛みが走ったからである。その禍々しい感覚、これは……

「——敵襲！」

誰が発したものが、鋭い一声が響いたと同時に、その場にいた刀たちは一斉に臨戦態勢へと転じた。

審神者の身を悪寒が走る。本丸は審神者と一心同体だ。それを覆う皆を守るために巡らされた囲いが、悪意ある者たちによって手荒く打ち壊されようとしているのを、まるで我が身に起こっていることのように感じていた。

更に、毒ガスの如く囲いの亀裂から忍び込んでくる悪しき気が、それと対極のちからと血を持つ

からだを蝕もうと這い寄ってくるのを感じ、その感触に大きく身震いをした。

呆然としていたのは、恐らくほんの一瞬だった。

しかし、その僅かな間に、審神者はおぞましい未来を垣間見た。

「……きよみつ！ 清光はどこなの？ 彼のところへ行かせて！」

彼女は自らの手を強く握って離さない刀へそう懇願したが、それはゆるむどころか、より強くなっただけだった。

「大将、こんなとこでなにしてるんだ、早く安全な場所へ逃げてくれ！ ——おい、どこかの加州の旦那、あんた、大将を守れるのか？」

乱と共に駆け込んできた薬研が、近寄ってくるなり鬼気迫る様子でそう問うた。

それにゆるりと頷いて笑った加州清光は、

「俺、これでも相当つよいからさ……安心してくれていーよ。紅藤のことは、俺が守る——絶対に」

と軽い口調で言うと、審神者のからだを軽々と担ぎ上げて部屋を走り出た。

「ちょっと、どこへ連れていくつもりなの？ あなたとなんてやだ、私、清光のところに行く！ 離して！ 離してってば！」

「あーもう、危ないって！ 悪いけどさ、紅藤。いくら泣かれても叩かれても、それはダメ。それはできない。だって俺はさ、俺は——知ってるんだ、これから何があるか。この先、どんなことが起こるかをさ」

縁側を降り、置いてあったブーツを素早く片手で引っ掴むと、加州清光は庭の奥へ向かって駆け出した。

\*\*\*\*\*

---

——遠いどこかから、誰かが私に話しかけている。

やさしく、歌うようなその口調は、まるで眠る前に母が読んでくれた絵本のおはなしのよう。とても懐かしい声音で、懐かしい言い方で、私に何かをささやいている。それはとても心地よくて、とろとろとまどろみそうな意識をなんとかつなぎとめたいと思う。ずっと、その声を聞いていたいと思う。もっとよく聞こえるようにと耳をそばだてる。

どんなお話を聞かせてくれてるの。  
なにを私に聞いて欲しいの。

それはそめそめと私の耳に、やさしく何かを語り続けている。  
それはどこかで聞いた声で、その話はどこかで知っている話。  
……知っている？ 私はそれを知っている？  
そんな筈はない。

けれど、それはまるで私のことのように。

あるところにいた、可哀相なだれかの話。  
愛するものと離れ離れになった、かなしい誰かの話。  
それは巡る因果、続く歴史、過去、そして未来。

未来。

——その男は、悪しき望みを抱き、政府を、歴史修正主義者を、自らの持つ禁断のすべで出し抜き、この世の頂点に立とうと夢みた。

——男は、形だけである妻のちからを、それが亡くなれば娘のちからを、己が野望のために利用せんとした。

——それに死に物狂いで抵抗した娘は、その身に呪いを受け、死の床についた。

——娘は、強いちからを持って生まれてきた。その目は、盲いてもなお真実を見通し、今の先、遠い未来までを見通すことができた。

——それは悪夢のような未来。混沌とした、喜びも希望もない世界。地獄というものがあるならば、まさにこのこと、と人々が嘆き伏しまるんで苦しむ世界。

——そんな悪夢を、娘は断ち切らんとした。

——我が恋人を、はじまりの刀を、過去へ送る。その先には、鍵となる者がいる。

時計は先  
時を遡る  
歴史改変  
遡るのは  
刀剣のみ  
阻止する者たちは  
望を託し  
遠い昔に  
送り込む

——ただ、未来に光を与えんがため。

.....目が、覚めた。

\*\*\*\*\*

「——紅藤、大丈夫？ やつらの悪い気に当てられちゃったってやつかな.....ダメそうなら、俺の膝、枕にして寝てていいから。とりあえずここなら見つかる心配ないし」  
ぼんやりとしながら、その言葉を聞いた。

周りを見回せば、庭園の奥まったところにある、普段は存在すら忘れていた蔵の中であるようだった。そして辺り一帯に、よく知っているようでその実よくわからない、何者かが編んだ結界が展開されているのを感じる。その気配はとても親しいような、どこか懐かしいものだった。

.....さっきの夢、あれは何だったのだろう。

まだ意識はふわふわとしており、束の間みた夢の中にいるような気がする。

なんだか不思議な夢だった。

——そしてあれは、誰の話だったのか。

「紅藤.....？ 本当にだいじょーぶ？ 無理しないでさ、俺の膝に——」

「ねえ、あなたのあるじ様って誰なの、その人って.....もしかして、私に関係のある人なんじゃないの？ あなたは何を知ってるの？ お願い、教えて」

私はまだうまく回らない口で、自分を助けると言う刀に必死にそう乞い、すがつた。

何かとても恐ろしいことが隠れている気がする。

なにかとても怖い真実が隠されている気がする。

そんな予感が走る。

「——それは言えない」

しかし、誰かの加州清光は手短かにそう言って口をつぐんだ。

「どうして？ きっと私に関わりがあることなんでしょう？ お願い、今すぐあなたが知っていること、隠してることを全部おしえて。でなきゃ私.....ここから出る」

すると、視線にほんのりと怒りをにじませた加州清光は、

「そんな状態でなに言ってんの.....まともに歩けもしないくせに。とにかく今は、おとなしくここにいてよ。知りたいことは——後で全部おしえるからさ。それは約束する。けど、今は言えない。絶対に」

と、強引に自らの膝へ私を寝かそうとする。

「やめて、お願い、ほんとのこと教えて.....何も知らないうちに何かが変わるとか、終わっちゃうとか、そんなの嫌なの.....私の王子様なんでしょ？ 王子様は、困ってる相手を助けてくれる、正義の味方でしょ？」



とうとう泣き出した私にも、加州清光は動揺したりしなかった。

彼のまとう空気はいつもやさしいけれど、どこか突き放すような一抹の冷たさがある。何もかもを、なにかを隔てて見ているような感じが常にある。

そして今も、ぼろぼろと涙をこぼす私の髪を撫でて宥めながらも、こころは決して開いていないように感じられた。

「あのさ、紅藤……それは違うよ。王子様っていうのはさ、正義の味方なんかじゃない。身勝手で、自分の欲に忠実な、ただの男だよ。たまたまそれが困ってる女の子を救うことになっただけであって、一貫して王子がしたことは『欲しいものを力づくで手に入れる』、それだけじゃん」

そして、私の頬をそっと手の甲でぬぐうと、

「……だからさ、紅藤、俺もそうなんだよ。俺がしたいことって、君を守る、それだけなんだよな。正直なこと言えば、それ以外はどーでもいいとさえ思ってる。俺はそのためだけに、遠い遠い旅をして、ここまでやって来たんだ。ただ、君に会うためにさ」

と続けた。

とてもやさしい声音で、やさしい言葉で、とても残酷なことを彼は言った。

それでも、私はあきらめなかった。

「私が望んでるのは、ただ守られることなんかじゃない。自分の見えないところで何かが変わってしまったのも知らずに、自分だけが安全でいるなんて嫌なの。すべてをこの目で見て、受け止めて、立ち向かっていきたいから、審神者になったの。その気持ち……わかるでしょう？ ——ねえ、あなたは、どこかのあるじ様の『最初の刀』なんじゃないの？」

その言葉は、今度は彼に届き、頑なに何かを少し揺さぶったように思えた。

そういう手応えがあった。

さっきの夢の中で聞こえてきた声、

——我が恋人を、はじまりの刀を、過去へ送る。

それはきっと彼のあるじ様のものだと、何の根拠もないのに私は確信していた。

きっとこの刀の持ち主と私の間には何かしらのつながりがある、そう思えた。

彼の瞳に宿る光が揺れる。

それはそのまま、彼のこころの揺らぎであるように見受けられた。

私はもう一度、「本当のことを教えて」とこころから彼に願った。

「——わかった。ただ、無理やり外に出るとか、そーゆーのは絶対しないって約束してくれる

？ ……俺がどんなことを話しても、君がどんなことを知っても、決してここから出ないって」

じゃないと話さない、と彼は言った。

私は仕方なく頷く。それが条件であれば、呑むほかはない。

しかし、私は甘かった。

迷いなく頷けたのは、あくまで告げられる内容を知らなかったからであって、もしどんなことが語られるのかを事前に知っていたなら、けして承諾はできなかつただろう。

でも、そのときの私は何も知らなかった。

想像はしても、その範疇を超えることは考えが及ばなかつたのだ——

\*\*\*\*\*

---

彼は、沈んだ表情でぽつりぽつりと話し始めた。

ある女性審神者の初期刀であったこと。

その人は、名家の血を引く男女の間に生まれ、それぞれのちからを譲り受けた天才児であったこと。

その両親がどのような人たちで、どのような仕打ちを彼のあるじにしたのか。

運命に翻弄されながらと父と対峙した彼女が、どのような最期を迎えたのか。

そして、託された望みを抱いて、遠い旅をして私に会いにきたということ。

「.....つらかったね」

彼は目を伏せ、黙って首を横に振った。

「つらかったのは俺じゃないよ」

「私もね、あなたのあるじ様と似たような生まれだから、あるじ様の苦しみ、全部じゃなくてもわかるように思うの.....そして、あなたがどれだけ愛されていたのかも」

彼がはっとした様子でこちらを向いた気配がした。暗がりの中でも、そこに涙がたたえられているのが見えるようで、私はそっとうつむいた。

「ねえ、もういいでしょう、ほんとのこと教えて.....これから何が起こるの？ 私とあなたのあるじ様、その間を結ぶものは何？ どうして子供の私に会いにきたの？」

暗く静かな空間に、私の問いかけだけが響いた。

ふれあっている彼のからだに小刻みにふるえている。

彼の答えを息を潜めて待ったが、それは返ってこない。

静けさの中でじっと息を潜めていると、今更ながらにじわじわと焦りが込み上げてくる。

外で何が起きているのか、みんなはどうしているのか、それを推し量ることすらできない。

私はふたたび同じ問いかけを試みたが、やはり彼は黙したままで、今は何も話すつもりがないという意思が伝わってくるのみだ。

「ねえ.....こうしている間にも、みんなが怪我してるかもしれない、取り返しのつかないことになっているかもしれないの、教えてくれる気がないなら.....私、ここにいる意味ないよ、みんなを助けに行きたい」

そう言い腰を浮かせた私を、強い力で加州清光が抑え込んだ。

「約束したよな、何を聞いてもここから出ないって。そんな真似したくないけど、もし紅藤がそれを破るつもりなら、俺、力づくでも止めるから」

「離して！ 私は、あなたのあるじ様の縁者である前に、審神者なの。みんなの『あるじ』なの。あなたなら、わかるでしょう？ .....私の本丸は、私の刀は、あるじたる私が守るの！」

彼に抗いながら右手で服の裏側を探る。護身用にいつも持ち歩いている符をうまく指先で探り当てた私は、そっとそれを抜き出し、「痛ッ！」とわざと大仰な悲鳴をあげた。  
とっさに彼の腕がゆるむ。その際にそれへ息を吹き込み、私は大きな声でこう告げた。

「——加州清光、命じます、私から離れなさい！」

それはいちかばちかの賭けであった。

彼のあるじが自分の縁者である、同じ血が流れているという前提のもとでしか、この命令は効果を発揮しない。

もし彼の持ち主に私と同じ血が流れているのならば、少なからず影響を受ける筈だと踏んでのことだった。

——果たして、彼の身は見えないものに拘束されたようだ。

しかし、やはり不完全であるようで、からだの軸だけをかろうじて押さえているに過ぎない。できるだけ早くここを離れなければ。

私はよろよろと立ち上がり、暗闇の中で出口を探そうと歩き出す。

「……待ってよ！ 行っちゃダメだって！ お願いだからここにいてよ……でないと、未来が救われない！」

背にかけられた声に振り向く。

「——どうして？ もしかして……私は今日、敵襲で死ぬの？ あなたが阻止したいことは、『私の死』なの？」

そう静かに問いかければ、彼は「……ちがう」と絞り出すような声で答えた。

「今日、いのちを落とすのは君じゃない……この日、君の誕生日にいなくなるのは」  
ひどく苦しげに、彼が言葉を継いだ。

「——君の初期刀の、加州清光なんだ」

……足がひどくわななくのを感じた。

激しい恐怖に見舞われたときに人は震えるものなのだと、こんなにもからだを自分の思う通りに扱えないものなのだと、私は初めて知った気がしていた。

「きよみつ……きよみつ、今いくから……そばに、行くからね」

がくがくと笑う膝を叱咤して、何とか数歩、歩き出す。暗い中を少しずつ、物を伝ってじりじりと進む。

「紅藤！ 行かないで、話すから！ 知りたいこと、全部おしえるからさ！ 行っちゃダメだって……紅藤……」

泣きそうな声が、後ろからまだ聞こえる。

不意に、何か不安定なものに手がふれた……と思ったら、頭上から何かがどさどさと落ちてきた

。もうもうと埃が舞い上がり、思わず咳き込む。幸い、落下したのは布で作られたものだったので、頭に当たりはしたものの、それほどの衝撃ではなかった。

「紅藤ッ！ どーしたの？ 大丈夫？ 返事して！」

悲痛な声を無視してじりじりと進む。

やがて、時間はかかったが、扉らしきものの前まで辿りつくことができた。

「……じゃあね、誰かの加州清光。私、たとえ自分の身がどうなっても、たいせつな刀を守ってみせるから。心配してくれたこと、やさしくしてくれたこと、そして——遠くから約束を守って会いに来てくれたこと、ありがとう」

検討をつけた方向へかけた声に対する返答は、喉も張り裂けんばかりの絶叫だった。

「ダメだッ、絶対に行っちゃダメだって！ 紅藤、君は俺のあるじの『母さま』なんだ、俺のあるじは……何よりも大事な恋びとを目の前で失ってぬけがらのようになった君が、望まぬ男に嫁がされて産んだ娘なんだ！」

思わず足が止まる。

恐らく夜目のきく彼には、私の姿が見えているのだろう。立ち止まった私に向かい、更に声をかけてくる。

「あるじは……自分の父親を止められなかったことで、最期まで自分を責めてた。自分がいなくなった後にどんなむごい未来がくるのかと怯えてた……だから、自分の存在自体を『なかったことにする』ために、俺を過去へ飛ばしたんだ」

——父がずっと抱いていた悪しき企みを実行に移そうと考えたのは、秀でた強いちからを持つ母と出会ったせい。

ならば、そもそも父と母が出会わなければいい。

いや、それ以前に、母のところが壊れなければ審神者をやめずに済んだ。

母が実家に戻らざるを得なくなったのは、本丸が敵襲に遭った際に恋びとであった刀が母を庇って折れたせい。

ならば、恋びとが折れなければいい。それが無理なら——違う者に恋をすればいい。

「……なら！ どうして清光を見殺しにするようなことをしようとしたの？ 一緒に戦って、彼を守ってくれるっていう選択肢はなかったの？ どうしてよ！」

私のヒステリックな声が暗闇に吸い込まれていく。

荒くなった息を静めながら返事を待てば、小さな、後悔のにじんだ声が返ってきた。

「それは——あの刀が、君を本当にしあわせにできるとは思えなかったから……。俺は、あるじ

のために、もう二度と会えないのを、最期を看取ることすらできないのをわかっていて、傍を離れた。それが、あるじの、彼女の、一番の望みだったから。だから、胸が張り裂けそうにつらくても、そうしたんだ！ あるじが死んでしまったら、俺は刀に戻り時を越えられない。だから、今にも事切れそうなあるじを残して……こうして……どれだけ心細かったかわかんないのに、怖かっただろうってわかってるのに、でもこうして……」

そこで息を継いだ加州清光は、泣いているようだった。

見通せない暗闇に、悲しみの気配が濃く漂っていた。

「あるじの読み通り、時を越えた俺は、あるじの安否に関わらず存在を保っていた。けれど、そのちからはもう随分と弱っていたから、予定とは違う時代へと飛ばされてしまったんだ……それが、野原で会ったあのときだよ、紅藤」

脳裏にあの日の光景がよみがえる。

さやさやと揺れる草、ちいさい白い花で編まれた冠、やさしくてきれいな、彼の姿――

「まだ幼い、それこそ自分が審神者になることなんてまだわかっていない君に、俺はしるしをつけた。次に時を移ったときに、迷わずに会いにいけるように。それから、然るべきときまで思い出さないよう、記憶に封をした」

でも出会っちゃったけどさ、と彼は自嘲気味に笑った。

「まさか紅藤たちが、偶然の事故とはいえ過去に介入してくるとは思わなかったから、あのときは焦ったな……だから俺は、過去の君も、今の君も、出会う前に知ってたんだ。そして、君が恋びとに選んだのが俺と同じ加州清光だってことも、ずっと前から知ってた……嬉しかったよ、君は――母親だから当然だけど、あるじと似ていたし、二回も選んでもらえたような気がしてた。でもさ」

彼の声が低くなった。

「アイツは、俺とは違ってた。全然、覚悟も強さも持ってなかった。失望したよ、それに……こんなやつに、大事な君を任せるわけにはいかないって思った。もし運命が変わってアイツが助かったとして、そのまま紅藤と一緒にいたとしても、いつかは君を泣かせて、あるじと俺につながる未来へとルールを切り替えるんじゃないかって、そう思った」

暗くて見えないのに、彼がまっすぐ私を見据えているような感覚がした。

「だから俺は、アイツを守るんじゃなく、アイツがいなくなった後の君を支え、しあわせにする方を選んだ」

沈黙。

それは暗闇の中において、互いの息遣いすら感じ取れるような重苦しい空気を生んでいた。

「……なっとくできない」

無意識の内に口をついて出ていた。

「え？ 紅藤？」

「そんなの、納得できない！ あなたに清光の何がわかるの？ これまで一緒に歩んできた道のりの何を知ってるって言うの？ あなたにとってのあるじ様がそうであるように、私にとって清光は誰も代わりになれない、唯一の存在なの……清光がこの世にいないなら、たとえ誰が私をどれだけ愛してくれようと、私はそんな世界、いらない……！」

見えない中を、手探りでかんぬきを外す。

重い扉を体重をかけて押し開き——もう、私は振り返らなかった。

……どんなに、彼が呼び止めようとも。

\*\*\*\*\*

---

走る。まだ完全に思うようにならない重いからだを引きずりながら、息を弾ませて私は清光を探した。

「きよみつ、きよみつ、どこなの……！」

声は広い庭園に頼りなく響き、それに対するいらえはない。

朝は晴れていた空は、今にも泣き出しそうに表情を変えている。起きたときは、珍しい梅雨の晴れ間に「日頃の行ないがいいからだね」とみんなで笑いあったのに。

湿った風が頬に吹き付ける。こころを静めて探してみるが、禍々しい気配は感じられず、むしろ空気は落ち着いているようにすら思えた。

胸に手を当てて強く念じてみる。

私と清光の間には、強い絆が結ばれている筈だ。呼べば、きっと答えてくれる筈……互いのいのちがある限りは。

——きよみつ、お願い、ここにきて。今すぐ会いたい。

ぎゅうと目を閉じて、いとしい者が来てくれるのを待つ。

守ってもらいたいわけじゃない。

私が、守りたいの。

たいせつなものも、しあわせも、誰かの笑顔も、これからも続く歴史も。

だから、こうしてここにいる。

だから、私はここにいるんだ。

やがて。

「——あるじ！」

泣きそうにいとしい声が近づいてくる。

目を開けなくたってわかる。

それが誰なのか、どんな顔をしているのかだって。

なぜなら——彼は、私の運命だから。私だけの「選択」だから。

それは誰にも奪われない、誰が変えることもできない、私だけのものだ。

だから、もしも彼を失うときが来たとしても、私はきっとすべてを失ったりしない。

そんなことになってしまったら、彼が私のもとへ降りてきてくれた意味が、共に目指したもののすべてが、過ごした日々が、無駄だったことになる。

歴史なんてたぶん、正しいも正しくないもなく、そうなるべくしてなったもの。それ以上でもそれ以下でもないもの。誰の望みも、誰の悲しみも、誰のしあわせも、その中であってはただ風



の前の塵と同じ。世界は平等に残酷で、そして素晴らしい。  
たとえそれが——私にとって過酷なものであっても。  
だからこそ、今こうしてそばにいられるなら、幾度も幾度も手を伸ばそうと思うのだ。  
二度と会えなくなる前に、この想いを伝えたいと願うのだ。

足音、風、ぬくもり、彼のにおい。  
勢いよく私を抱きしめたかけがえのない恋びとは、血のにおいをさせていた。  
流れる熱い血、いのちのにおい。

——清光は、生きてる。

「きよみつ……無事でよかった……みんなは？ もう敵はいないの？」  
「だいじょーぶ、もう全部かたづけたよ……今、みんなで討ち残しがいないか探索してるんだ」

——彼の知る過去は変わったのだろうか。敵襲は失敗に終わり、清光は折れてない。  
だとしたら、もう何も心配することはないのではないだろうか。  
強まる腕の力を感じながら、蔵に残してきた彼のことを考える。不完全な術だったから、そろそろ拘束も解けていておかしくないが……。  
清光は緊張が一気にほどけた様子で、「あるじ……あるじ……」とつぶやきながら、ぐりぐりとひたいを私の肩に押し付けている。それが涙声であることを気づかないふりをして、私は、ずっと言いたかった言葉を口にした。

「清光、これまでのこと、本当にごめんね……私、こころ変わりなんてしてない。私は、今も、これからもずっと、清光だけが好き。それだけは信じて。もう離れたりしないで……」

その言葉に、顔を伏せたまま幾度も頷いた恋びとは、

「あるじ、あるじ、本当によかった、どこにもいないから、俺、アイツとどっかに行っちゃったんじゃないかって……あるじが無事なら、あるじがそう望むなら、それでもいいって思った。その方がきつとしあわせなんじゃないか、って……でもさ、でも俺、やっぱり嫌だ。あるじの傍にいたい……もう子供っぽいやきもちで困らせたりしないから、ちゃんと大人の男になるからさ……だから、ねえ」

言葉を切った清光は顔を上げ、やさしくほんのわずかだけ身を離すと、まっすぐ目を見て

「——俺の、お嫁さんになって……紅藤」

と告げた。

じっとこちらに向けられた、紅い瞳がまるで宝石のようだ。

何か言おうとするのに、胸がつかえて声が出ない。一言でも言葉を発したら、同時に泣き出し

てしまいそうだ。

それでも構わない、私、わたしは——

「きよみつ……」

不意に風が止まった。

辺りに異様な気配が突然に立ち込める。

全身が総毛立つ。

斜め上の中空にひどい違和感を覚え、思わず目をやったと同時に、その空間がぐにやりとまるで熱に溶けるプラスチックのように歪み、ぽっかりと穴が開いた。

「……………！」

あまりのことに声が出ない私を腕から開放し、そっと背に庇った清光はすらりと抜刀する。

「ごめん、続きはまた後で……ったくさあ、こんないいところ邪魔してくれちゃうとか、王庭に思い切り蹴られても文句いえないと思うんだよな」

首を鳴らす仕草をしながら軽い調子でそんなことを言う清光を、泣きそうになりながら見つめた。

今、私のこころにはとてつもない不安と恐怖が渦巻いている。

ついさっきまで、あんなにしあわせな気持ちであったのに。

そんなこと考えたくないけれど、どうしてもあの彼が下した予言が頭から離れないのだ。

——まさか、まさかこの場で、彼の知る過去が現実のものとなってしまうたら。

そう怯えわななしている間にも、あり得ないところに開いた穴はどんどんと広がり、その向こうに広がる真っ暗な空間がよく見えるようになっていた。そこには「虚無」としか形容しようがないものがねっとりと渦巻き、時おり稲妻のような光が走っている。

「ちょっとだけ寂しい思いさせてごめんだけど……どっか、できるだけ離れたところに隠れてて。俺、見られてると緊張しちゃうタイプだからさ」

清光の笑うその顔が、熱く歪んで見えない。

「ね……？ いい子だからさ、ほら早く！」

穴からずるりと何かが這い出してくる。

「どーしたの？ 早く、早くここから逃げろって！」

それは見慣れた時間遡行軍とは違う姿をしており、その身には青白い稲妻をまとって、

「聞こえないの？ 逃げて！ 早く！ 走ってよ！」

……ああ、これがこれまでうちの可愛い刀を散々に痛めつけてくれたやつらか。

「検非違使……」

ぼうっと這い出て来たそれらを見つめ、そうつぶやいた。

そうか、今日という日を清光が無事で超えることは、検非違使たちにしてみれば許されざることなのだ。

——つまり、こいつらは清光を折らせまいとする抵抗を「罪」とみなして、ここへ……。

「……べにふじッ！」

腹の底から出る、鬼気迫る声で名を叫ばれて、ようやく私の正気が戻ってきた。

「清光、後ろッ！」

素早い槍の攻撃は、すんでのところかわした清光の右腕をかすめた。その傷から少量の血が飛ぶ。続いて、体勢を崩したところを狙いすまして、敵の太刀が上段から振りかぶり斬りつけてくる。それもかわせば、すぐさまもうひと振りの敵太刀が左に薙ごうとしてくる。

私はその場から動くことができず、ただ見つめることしかできない。足も笑ってしまっており、とても動けそうにない。どうしようどうしようとそればかりがぐるぐると回る。

清光はしなやかな動きで攻撃をかわしながら、反撃の隙を窺っている。しかし、元より負傷している身、多勢に無勢のこのままでは、いずれ疲労で凌ぎきれなくなるのは明白だ。

「……誰か、誰かを呼ばなくちゃ……」

そうつぶやく間にも、清光が避けきれず肩口を切り裂かれ、顔を歪めるのが見える。

——もし、彼に施した拘束がまだ僅かでも残っているなら、私の念が届くかもしれない。

私は必死に念じた。

どうかここへ来て欲しい、どうか清光を……救って欲しいと。

そして、指笛を吹いた。

……今剣が真剣な顔で私に根気よく教えた指笛、

「あるじさまは、それはひどいほうこうおんちなんですから、これくらいできないとこまります！ いいですか、みなとはぐれて、どうしたらいいかわからなくなったら、このゆびぶえでよぶんですよ、ぜったいですからね！」

そう腰に手を当てて言う見た目よりはずっと大人びた短刀に、幾度も練習させられた助けを呼ぶ手段。

私は泣きながら、繰り返し指笛を吹いた。

不意に、後ろからの突然の衝撃と共に、膝とてのひらに熱い痛みが走った。

驚いて視線を上げれば、そこに敵の薙刀が仁王立ちになり、私を見下ろしていた。

そして私には、清光が覆いかぶさっていた。

清光の全身はたくさんの刀傷が刻まれて、血に塗れていて、肩で息をしている。

——私がここに来なければ、あの蔵から出なければ、こんなことにはならずに済んだかもしれないのに。

必死に引きとめた彼がいた未来は、もしかしたら、私のこんな身勝手から生まれたものだったの

かもしれない。あんなに「行くな」と止められたのに。私がふらふらと外に出て呼んだりしなければ、すべてが終わるまでおとなしく隠れていたならば、きっと清光はこんな目に遭わずに済んだ。

満身創痕のからだを重そうに起こし、清光が刀を構えた。

「もういいよ……ごめんね、ごめんね清光……でも大丈夫」

私が、守ってあげる。

ぐったりと重い私を庇う腕を擦り抜ける。はっと顔を上げた清光が伸ばす手をそっと握って、今度は私が自分の刀を庇い、敵と対峙した。

「……あんた達は何者だか知らない。あんた達がしようとしてることもわからない。けど、絶対に私の刀は折らせない！ さっさと私を殺しなさい！ 加州清光が折れたことで自ら命を絶つのも、ここで殺されるのもそう違いはないでしょう」

——それに、ここで私が死んでしまえば、不幸な娘は生まれないのだから。

内心のつぶやきは隠し、私は異形の者たちを睨みつける。

そう、やっと気づいた。

彼があんなに望んでいた、不幸な未来を断ち切るもっとも手っ取り早い方法、それは——

「あるじ、なに言っちゃってんの？ そいつらは、歴史のためなら躊躇なく人を殺すんだ、逃げろ、早く！」

清光の悲痛な声と呼んだかのように、風に混じって雨が頬をぽつぽつと叩きだした。

やがて、こちらの言葉を解したのか、それともただ単に邪魔者を排除しようとしたのか、清光が仕留められなかった残党の大太刀と薙刀が、ゆらりと得物を振り上げた。

……さよなら、私の愛したものたち。

\*\*\*\*\*

——目の前には、黒いコートをまとった細身のからだだが、並んで横たわっていた。

どちらも同じ姿で、傷だらけで、特に左のひと振りには状態がひどく、折れずにいるのが奇跡だと思われるような有様だった。

「……どうして、どうして私を助けたりなんかしたの……どうして……」

そう繰り返す私の目からは、ひっきりなしに涙が落ちては血と埃にまみれてしまった戦装束を濡らした。

……もっと早くに気づくべきだった。

彼のあるじの望みが「己の存在そのものを消してしまうこと」であったなら、その母となる私の存在こそを消してしまえば済むことだったのだ。

そうすれば、面倒なことをせずとも、私がいなくなった時点で彼と彼のあるじの望みは叶う。

不幸な未来は決して訪れない。

初めての出会い——あの野原での邂逅を、彼は「あるじのちからが弱っていたがための手違い」というように言った。

けれど、もし——最初から何も間違っていなかったとしたら。

はじめから、その時代の私に会うために送り込まれたのだとしたら。

あの野原で、私はひとりきりだった。

周囲にはひと気もなく、両親は他のことに気を取られていて、もし私がいなくなったとしても、すぐには気づかれない絶好のシチュエーションだった。

幼い子供など、誰も人が来ることのないところへそっと置き去りにするだけでことは済む。

それこそ、獣の棲む山の奥深く、誰も住む者のない島、どこか別の時代にでも。

だからこそ彼のあるじは、あの日のあの場所へ彼を送ったのではなかったか。

母となった私は、己の腹を痛めて生んだ娘に乳を含ませるところか、笑いかけることすらしなかったという。

自分の存在を「なかったこと」のように無視をする母親を、物心ついた娘はどんな目で見っていたのだろう。

この世で唯一の無条件に愛してくれる筈の存在に、そんな仕打ちをされたその悲しさ、つらさ、遣りきれなさは如何ばかりであっただろう。

自分を「野心を遂げる道具」としてしか見ていない父と、自分の存在すら認めようとしぬ母。

そのような者たちの子供として生を受けた自分のことを、その運命を、そして何よりその両親を

。

……激しく憎んではいなかっただろうか。

「自分の生まれる前まで遡って、存在そのものを消してやりたい」

その思いは、自分自身ではなく……自分が生まれる原因を作った人間へと向かっていたのではないか。

——彼のあるじが最期に願ったことは、私の「死」だったのではないだろうか。

彼はきっと、そのような憎しみを、そこから生まれた願いを、愛する人に抱えて欲しくなかった。

自らの存在を過ちだと、「不幸な未来の元凶」なのだと思って欲しくなかった。

そして、死してなお「自分の親を手にかけた」という重い罪を、愛する人に負わせたくなかった。

なぜなら、彼女と出会えたことは、彼にとって何にも代えがたいしあわせであったから。

その存在は、彼を生かすただひとつの理由であり、彼の生における唯一の素晴らしいことだったから。

愛する人が、生まれたきたことを間違いだったと感じ自らを責めていることは、彼にとって、とてもとても悲しいことだった。

けれどそれと同時に、自分を厭い、または人として見ていない両親を憎まずにいられないことも、誰よりもよくわかっていたのだ。

そんな彼の思いと、愛する人の望み、どちらも生かすとするなら。

……あるじは、生まれてはいけない存在なんかじゃなかった。

異なるしあわせへの分岐によって「選ばれなかった可能性」であっただけなのだと、もし選ばれていたなら違うしあわせの種になっていた、そんな存在だったのだと、そう思える結末にしようと考えたのではないか。

そのためには、あるじの母となる人間は、必ずしあわせにならなくてははいけない。

間違った未来へとつながる男と出会わないために、ここから愛した相手に愛され、人生をまっとうしなくてはならない。

——俺はさ、紅藤……君にしあわせになって欲しいんだよな

——誰もが羨む、なんてレベルじゃなくて、普通のありふれた、でもあったかいしあわせを手にして、生きて行って欲しいんだ

——互いに好き合い大事にし合って、ずっと長い年月を手を繋いで歩むような、そんな相手と生涯を共にして欲しいんだ

——それは君のためだけじゃなくて……俺のためでもあるんだ。俺は君のしあわせが何よりの望みなんだ

だから、彼は、彼は……。

泣き崩れすがろうとする私を、周りの刀たちが押さえる。そんな衝撃すら最悪の事態につながりかねない、それほどまでに負傷し力なく横たわるからだに、私の涙だけが無力に落ちる。

そんな私を痛ましく見た他の面々が、右のひと振りを慎重に運び始めた。

瀕死の刀は、血の気がまるでなく蠟でできた精巧な人形のように、こんなときですらうつくしく見えた。

「すぐに……すぐに直すから……だからお願い、しっかりして……」

力なく投げ出された手にふれ、そう語りかける。

仮面のように生を感じさせなかったまぶたが僅かにふるえ、うっすらと開いた。

「べにふじ……？ 泣かないで……これでいいんだ……俺、が、間違ってた……やっぱり……ほんとに好きなやつと……一緒にいるのが……いちばんの、君の、しあわせ、だよな……ごめん、困らせて、悲しませて……ほんとにごめん……」

かすれたその声に、私は答えることができない。ただ涙ばかりがあふれて落ちる。

「……これで、不幸な俺のあるじは……救われる。生まれてきてはいけなかった可哀相な娘は、もう……いなくなるんだ……悲しみの、連鎖は、きっと断ち切れる……ほんと、感謝してるよ……だから、泣くことなんて、なにもないんだって」

もう指一本ですら動かすのは困難だろう彼は、それでも懸命に私の涙をぬぐおうと手を伸ばす。

——私と、満身創痕の「私の」加州清光の窮地に駆けつけてくれた「私の娘の加州清光」は、自らを盾として検非違使から守ってくれたが、空間のひずみから新たな援軍が現れたことでひどい傷を負った。

ほどなくして指笛を聞きつけた皆が駆けつけてくれ、すべて殲滅を果たしたが、身を呈して私を守り通したふた振りの状態は深刻であった。

必死に伸ばしていた彼の手が、私の頬へ届くことなくちからを失ってどさりと落ちる。

そして、私の目の前で、その薄いまぶたは静かに閉じられていった——

\*\*\*\*\*

その日は朝から素晴らしい青空で、狙ったかのような貴重な梅雨の晴れ間に、皆が「日頃の行ないがよいからだ」とふたたび口にした。

本丸はじまって以来の修羅場となった敵襲の日からひと月。

邸内の修繕もあらかた済み、なんとか日常が戻ってきたと言っても差し支えないくらいになった頃に、とんだ災難で延期となっていたあるじの誕生日祝いが盛大に行われた。

先日と同様、主役のあるじは起床と同時に幾振りもの刀につかまり、念入りな化粧を施され、髪を整えられている。

ただ、前と違うことは、同じ目に遭っている者が他にもいるということだ。

別室では、初期刀にしてあるじの唯一無二の想いびとである加州清光が、同様にあれこれと世話を焼かれている筈だ。

「あるじさん、すごくきれいだよ！ どう？ こうしてきちんとお化粧すると、結構違って見えるよね？」

「……えーと、それは『馬子にも衣装』ってことでいいのかな」

近ごろには珍しいあるじの後ろ向きな発言を、支度を手伝った乱藤四郎は

「や～だ、あるじさん、マリッジブルー？」

と笑い飛ばした。

本丸にいる刀すべてが力を合わせ、あるじがぐっすり眠っている間にしつらえたそこは、ちぐはぐなところもありつつも、十分に厳かで清らかに見えた。

外つ国で男女が永遠の愛を誓う場所を模した祝言会場。

それは、立て続けに様々なことを経験したくさん悲しい思いをした審神者へと、本丸の皆が用意したとっておきの贈り物であった。

刀たちには馴染みのないそのやり方を、「これがいいの！」と強く主張したのは乱で、その勢いと「女ごころがちっともわかってない！」との言葉に怯んだ他の者は、そもそも逆らおうという考えすら浮かばなかった。

とはいえ、不慣れなことと準備が難航するのではとの懸念もあったが、こんのすけが協力者に加わったことで、何とか予定の日に間に合わせる事ができたのだった。

聞けば、昨今では本丸での結婚式も珍しくないらしい。

こっそりと持ち込まれた花嫁衣裳その他の貸し出し一覧ひとつ取っても、現世に劣らぬ実に見事な品揃えであり、そのことは刀たちをたいそう驚かせた。また、それは政府が正式に刀剣男士と審神者の結婚を認めていることを暗に示すものでもあった。



ちなみに、あるじの着る衣装は多数決で決められた。新郎である加州清光のものは、一覽の頭に出てきたもっとも安価で無難なものに最初から決まっていたので、誰も関心を寄せなかった。

……式は厳肅な雰囲気の中とどこおりなく進み、やがて誓いの口づけを交わすために、新郎がうつくしいレースのベールをそっとめくった。

新婦である本丸のあるじは、これまでのいつよりも女らしくうつくしく皆の目には映った。

その様子を見つめる皆の間に、大きな感動が巻き起こる。

まして新郎の感激は言うまでもなく、その瞳はこころなしか潤み、射し込む日の光を受けてきらめいた。

——笑むときも、涙がこぼれるときも、しあわせなときも、つらく苦しいときも、

——互いの手をけして離さず、共に歩いていくことを誓います、

——この絆と愛は互いをつなぎ、けして離れることはなく、

——長く久しい時のそのまた向こうまで、共に旅することを誓います、

——たとえ死が互いを別つとも、この誓いは消えることなく、愛するものを守り導く再会へのしるべとなり、とわにえにしは絶えることなく、幾度でもふたたび巡りあうことでしょう……

そして、そっとくちびるが重なり、誓いは交わされた。

\*\*\*\*\*

すべてが終わり式場を出た面々は、ほぼもれなく男泣きをしていた。

それほど、この祝言は清らかで感動的なものであったのだ。

——誰かの慶びごとというものは、周りの者までしあわせにする。

そう誰もが思ったことであった。

こんのすけの号令で集合写真を撮った後、うつくしい装いの新妻とふたりきりになりたい新夫が、その手を取って散歩へ誘っている。その長々と引くみごとな裾を誰が持つかで、短刀たちがにぎやかにはしゃいでいる。

微笑み合いながら歩き出そうとした今日の主役たちは、静かに前に立った姿を認めて立ち止まった。

「……おめでとう紅藤、とてもきれいだよ」

「加州さん、ありがとうございます」

自分の妻とにこやかに言葉を交わすよそ者を少し面白くなさそうに見た新夫は、

「ねー、俺にはないわけ？ お祝いの言葉」

と口を挟んだ。

「あー……別にどうでもいいよな」

その言葉に耐え切れず花嫁は吹きだし、新郎は更にむっとし、傍で聞いていた者たちが苦笑した。

「なんだよ、折れ損ないの割に言うじゃん。地獄の淵から生還して、より一層ツラの皮が厚くなったんじゃないのー？」

憎まれ口を叩かれた側の加州清光は、

「そーかもね……って言っても、それも今日限りだけどさ」

と寂しそうに笑った。

そして、不意を衝かれて笑顔が消えた花嫁に向かい、

「これで……本当に俺の仕事は終わり。しあわせになってよ、違う未来で悲しんでた、不幸だった人たちの分までさ」

と言うと手を差し出した。おずおずと出された白いレースの手袋に包まれた小さな手を、きゅ、と加州清光が握る。

「どこへ……行くの？」

小さい声でそう問うた花嫁に、遠くから来た旅人は苦笑いをした。

「どこもなにも——もう俺には、行くところなんてないって……帰るところもさ。それに、ほら」

そう指差した足元は、空気に溶けるように薄れて消えていこうとしている。

それを見て、すぐさま事態を把握した花嫁の目にみるみる涙がたまり、こぼれ落ちる。その隣に立つ本日の主役である加州清光は、表情を硬くして黙っていた。

「……泣かないで、紅藤。こんなめでたい日にさ、俺のためなんかには涙を流すなんてもったいないって。俺のことはさ——あの野原で会った瞬間から今日まで、全部リアルな夢だったとでも思ってよ。夢なら、目が覚めればひとつ残らず消えちゃうだろ、そーゆーもんだって思って……忘れて」

さあ、と涼やかな風が吹いた。

木の葉がさやさやと揺れる。

それはまるで——はじめて出会ったあの野原のようで。

「俺とあるじはさ、ずっと一緒にいてしあわせだったけど、その道のりは、嬉しいこと、楽しいことより断然つらいこと、苦しいことの方が多かったんだよな……それはもちろん、あるじのせいじゃないし、俺が過ごした日々は、不幸だったわけじゃない、絶対に」

自分に言い聞かせるようにそっとうつむいた加州清光は、顔を上げたときには笑顔だった。

「そんな感じだったからさ、ここに来てからはずっと毎日がお祭りみたいだったよ。大勢の刀がいて、楽しいことや笑いがあふれてて、いつも賑やかでさ。俺は、ここに来られて、君たちに会えて良かったって思ってる——あるじにも、見せてあげたかった。あるじがすべてを懸けて守ろうとした未来は、こんなに明るくて、しあわせなところから生まれていくんだよって。あるじは間違ってたよ……って」

そして、目を細めて空を仰ぐ。

……あー、まぶしいな。

そう笑うその姿が、風に溶けてゆく。

彼がすべてを成し遂げ、新たな歴史への切り替えが先ほどの誓いで確定したこの世界において、もう「紅藤の娘の加州清光」は存在できないのだ。

しかし彼は満ち足りたような穏やかな顔で微笑むと、新夫の傍にずっと身を寄せ、何ごとかを囁いた。

そして身を離し、まるで王子のようなきれいな礼をすると、何ごとかを口にし、にっこりと笑って手を振って、

……消えた。

そこには刀すら残らなかった。まるで最初から何もなかったように、彼という刀が最初から存在しなかったかのように、跡形もなく消滅してしまったのだった。

彼は、こうなることを知ってた。

最初からすべて知っていて、すべてを覚悟の上で、旅をした。

——愛する人のために。

その存在を、祝福されたものにするために。

「最後に……なんて言ってたのかな。何を伝えたかったのかな」

鼻をすすってぽつりと口にしたりした新妻に、新夫は彼が立っていた場所を見つめたまま、

「……『お幸せに』って、そう言ってた」

と小さな声で答えた。

「俺には、『約束は代わりにお前が果たしてよね』って耳打ち、して——」

それきり夫婦となった刀とあるじは何も言わず、いなくなってしまった者の痕跡を探すように、さやさやと吹く風の中、一点を見つめ続けていた。

## 祭りの終わり

---

——あるじへ。

これがさいごの手紙だよ。

ねえ、あるじ、俺、ちゃんとあるじの望み、叶えてあげられたよ。

どう？ あるじの加州清光は、責任感ある立派で有能な刀だと思わない？ しかも可愛いし、言うことないよな。

もうこれできっと、あるじの恐れる未来は生まれない。

あの子たちはきっと、しあわせに続く道をつくっていつてくれる、そう思うよ。

旅に出たときは、あるじと離れ離れになったことがつらくて、さみしくて、どうして……って思った夜もあった。

けどさ、今では俺、ほんとにあるじに感謝してるんだ。

あの子と、その刀たちと過ごした日々はさ、俺にとってすっごく楽しくて……まるでお祭りみたいだったよ。

あの子の——あるじのお母さんの花嫁姿さ、すっごくきれいだった。男の方はまー、どうでもいいけど。

それでさ、あのふたりが永遠を誓った瞬間に、思ったんだ。

……あー、清らかな光が射してる、って。

それはきっと、未来を明るく照らす、希望の光なんだ、って。

だからあるじ、もうだいじょーぶ。

安心していいからさ。

俺、今日からまた旅に出るよ。

次の旅も楽じゃない道ゆきになりそうだけど、どれだけかかっても構わない、絶対にたどり着けるって……信じてるからさ。

だから、どうか旅の無事を祈っててよ。

——あるじのもとへと帰る、長い長い旅の無事を、さ。